



# JAAGA だより

日米エアフォース友好協会  
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会  
〒160-0002  
東京都新宿区四谷坂町9番7号  
ZEEKS 四谷坂町ビル3F  
編集：JAAGA 事務局  
印刷：東伸社  
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

## つばさ会 /JAAGA 令和4年度訪米成果報告 TSUBASA-KAI and JAAGA members participate in ASCC 2022



JAAGA members attend the Air Space and Cyber Conference 2022

### 1 はじめに

9月15日から24日の間、10名の団員による訪米事業を実施した。これは毎年実施してきた事業ではあるものの、これまで令和2年度はCOVID19の水際対策により渡航中止、昨年も引き続き渡航制限により2名での訪米であり、本来の規模による訪米としては3年ぶりとなった。

令和4年度のJAAGA訪米団は、団長杉山良行会長、副団長丸茂吉成顧問以下、前原弘昭理事長、武藤茂樹副理事長、尾上定正理事、荒木淳一理事、荒木文博理事、井上浩秀理事、上ノ谷寛理事、深澤英一郎理事の10名。

最初の訪問先はハワイ州で、太平洋空軍司令部及

びインド太平洋軍司令部を訪問し、指揮官及び幕僚との意見交換を行った。その後、ワシントンDCに移動して米航空宇宙協会（AFA: Air & Space Force Association）が主催する、2022年度航空・宇宙・サイバー会議（Air, Space & Cyber Conference 2022）に参加するとともに、JAAGA名誉会員である歴代の第5空軍司令官及び太平洋空軍司令官との交流を通じて、日米空軍種間の友好関係を促進することができた。

ワシントンDCでは、訪米団の歓迎会がシュワルツ元空軍参謀長の邸宅において盛大に執り行われJAAGA名誉会員等のご夫妻による熱烈な歓迎を受けた。

### ～ だより 第63号 目次 ～

つばさ会/JAAGA 令和4年度訪米成果報告	1	米空軍コーナー	27
「冬廣」、備前に帰る～日本刀返還のキセキ～	7	寄稿「米国ワシントンD.C.勤務所感」	29
レイモンド大将来日、昼食会開催	9	寄稿「米太平洋空軍司令部連絡官勤務概況」	30
第374空輸航空団司令官の交代式	9	(投稿募集のご案内)	31
第35戦闘航空団司令官の交代式	11	横田基地日米友好祭に参加	32
米空軍横田基地における日米相互特技訓練	13	(JAAGAグッズの紹介)	32
令和4年度JAAGA横田基地等研修	17	米国独立記念日を祝う嘉手納基地懇親会に参加	33
SPORTEX '22-A	20	三沢基地エアフォースボールに参加	33
米空軍将校 航空自衛隊勤務だより	22	JAAGA理事の活動紹介「広報理事」	34
第43回関東地区スペシャルオリックス支援	24	新入会員紹介、(賛助会員の皆様へ)	35
航空自衛隊コーナー	25	会員募集、編集後記	36

参集された名誉会員の方々は、ハーバート J. カーライル元太平洋空軍司令官、ケニス S. ウィルスバック現太平洋空軍司令官、ブルース A. ライト元第 5 空軍司令官、エドワード A. ライス元第 5 空軍司令官（元航空教育集団司令官）、サルバドール A. アンジェレラ元第 5 空軍司令官、ケビン B. シュナイダー前第 5 空軍司令官（現空軍参謀本部先任幕僚）、ジョン W. レイモンド元第 5 空軍副司令官（前宇宙軍作戦部長）、以上 7 名。



JAAGA President Sugiyama Yoshiyuki (right) and AFA President Bruce A. Wright (left)

また、本年度は、初めてスティムソン研究所において、カーライル元太平洋空軍司令官等との意見交換を実施するとともに、公開セミナーにより情報発信を行い、本事業の充実を図ることができた。更に、AFA と JAAGA の連携により、米国に所在する日本刀の日本への返還を実現し、日米友好に大きく貢献することができた。

訪米の最後に、在米日本大使館において富田駐米大使を表敬訪問し、日米関係及び米中関係の現状について、ご意見を拝聴することができた。

## 2 太平洋空軍司令部及びインド太平洋軍訪問



JAAGA members make a courtesy visit to Gen James A. Jacobson, Deputy Commander of PACAF

太平洋空軍司令官のウィルスバック大將がワシントン DC に出張中のため、後日、ワシントン DC でお会いすることとし、ハワイでは太平洋空軍副司令官のジェイコブソン中將を表敬訪問した後に、副司令官及び司令部主要幕僚とともにラウンドテーブルでの意見交換を実施した。

戦略的競争相手であり、軍事的な活動を活発化させている中国を抑止するため、太平洋空軍の日々の活動は、「中国、中国、中国」であり、大変忙しい日々を送っていた。

中国の A2/AD (Anti-Access/ Area-Denial) 脅威下において米軍は同盟国等とともにハイエンドな戦いに如何に勝利するか、如何に抑止するかを危機感を持って考えており、同盟国の立場で踏み込んだ議論を行うことができた。

米空軍は太平洋戦域において、A2/AD の脅威圏内で航空戦力を運用するために ACE (Agile Combat Employment) コンセプトを考えており、当該コンセプトを実用化するために、空軍長官及び参謀長のリーダーシップの下、体制整備を進めるとともに、現場としては実動による検証を実施している。

ACE コンセプトは、A2/AD の精密弾道ミサイル攻撃の下で脆弱な航空戦力を分散運用することにより戦力の保全を図りつつ、A2/AD 圏内で航空戦力を発揮するというものである。この考え方は、緒戦に圧倒的な航空戦力をもって完全な航空優勢を獲得し、事後の作戦を有利に進めるといった湾岸戦争の戦い方を大きく変更するものであることから、空軍としてはまず、組織内でコンセンサスを得ることが第一の目標であり、多くのことについて考え方を変えて行く必要があると考えている。

そもそも航空戦力の運用が難しい西太平洋戦域にあって、航空戦力の分散運用を実現するには、作戦基盤である飛行場の確保が死活的に重要であり、A2/AD 圏内の第一列島線に位置する我が国の各種飛行場の使用は必要不可欠であり、これを実現することは重要な課題である。

我が国は日米共同に関わる体制として BMD を含めて一定の共同作戦を行う体制を築いてきたものの、米国が対等の競争相手に対応するために同盟国との更なる連携の強化が必要と考えていることから、我が国としても、新たな日米共同体制の構築のために更なる努力が必要ではないかと考える。

インド太平洋軍司令部では、幕僚長のラッド少将及び幕僚との懇談において、歴代司令官のキャンペーンプランである、主導性の発揮及び維持 (Seize Initiative) には多くの進展があるが、更に実施すべきことがあるとともに、統合抑止 (Integrated Deterrence) は米国一国では出来ず、同盟国等と協力し、より多くの国で、「『中国』 対 『多くの国』」といっ

た構図を作り、活動を展開することが効果的であるとの考えであった。

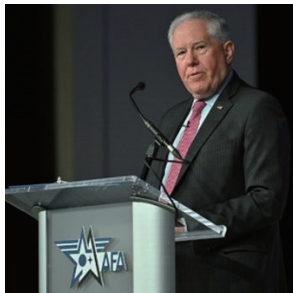
### 3 航空・宇宙・サイバー会議 2022 (ASCC2022) への参加



ASCC は、米航空宇宙軍協会が主催し毎年行われる会議である。3 日間にわたり約 50 のセッションでスピーチ及びパネルディスカッションが実施され、中国、ロシア、宇宙、マルチドメイン及び無人機等をテーマとして、最新の話題について発表、或いは議論が展開されていた。約 50 の軍需産業がスポンサーであり、約 130 の企業が大小様々な展示ブースを出展していて、日本からは、川崎重工がブースを出展し存在感を示していた。今年度の ASCC への参加者総数は、延べ 18,000 人であった。

#### (1) オープニングリマークス

会議冒頭のリマークスでは、フランク・ケンドール空軍長官 (Frank Kendall III, Secretary of the Air Force) が登壇し、スピーチを行った。彼は、中国軍の近代化という脅威に備えるため、空軍の能力のギャップや運用上の課題を克服するため、次の 7 つの作戦遂行に必要な事項を示した。



Frank Kendall III,  
Secretary of the Air Force

①宇宙体制の戦闘領域への対応、② C3 (Command Control & Communication) 戦闘管理プログラムの近代化、③空中・地上の移動目標を識別できる能力の獲得、④次世代航空優勢 (Next Generation Air Dominance) 集合体を定義し調達、⑤強靱な前進基地の提供、⑥ B-21 を中核とした集合体の進展、⑦同様な敵との戦争に備えて変革、動員する能力の強化

また、これ以外に、電子戦、弾薬、及び輸送・空中給油の能力開発の必要性を強調し、空軍力を強化して行く決意を述べた。

次に、創設 75 周年を迎えた米空軍の C.Q ブラウン空軍参謀長 (Gen Charles Q. Brown Jr., Chief of Staff of the Air Force) が登壇、米空軍は、この 30 年間、技術的に追従を許さない安定した優位性を維持してきたが、もはやそれは約束されたものではなく、

中国の台頭や核保有国のロシアの軍事侵攻が生起し、安保環境が根本的に再形成される転換期にあるとの情勢認識を示した。国家安全保障には近代化された空軍力が不可欠であり、空軍は「変化を加速」させなければならず、「過去にも実績があり、今回も実現できる」(We have done this before. We can do it again) との言葉で空軍を鼓舞した。



Gen Charles Q. Brown Jr.,  
Chief of Staff of the Air Force

過去に成功を収めた事例は次のとおり。

- ・1940 年代；ベルリン空輸では 45 秒ごとに輸送機を着陸させ 1 日に 13,000 トンを空輸
- ・1950 年代；拡大抑止のため、僅か 2 年間でアトラス ICBM を打ち上げ
- ・1970 年代、1980 年代；ステルス技術の開発と F-117 の実戦投入
- ・1990 年代；コソボ OAF (Operation Allied Force) で、短期間で MQ-1、B-2 を初の実戦投入、AOC (Air Operation Center) の実戦運用

また、現在進めている改革の分野について、以下のとおり説明した。

- ① Mission Command では、米国の対中優位は同盟国及びパートナー国との連携であり、指揮統制システムの設計段階から統合 (Integrated By Design)、
- ② Force Generation コンセプトは既に初期運用段階 (Initial Operational Condition) を迎え、「準備→レディ→展開→休息」という 6 ヶ月毎の段階を 2 年サイクルで実施、
- ③ ACE コンセプトについては、真剣に取り組んでいて、C2 の確立、脅威下の後方補給、強靱な作戦基盤の確保、IAMD 体制の推進等が重要、そして多機能なエアマンが必要不可欠

最後に、米宇宙軍の J. レイモンド作戦部長 (Gen John W. Raymond, Chief of Space Operations) がスピーチを実施し、宇宙軍は創設 3 年で、以下のような大きな進展と成果を達成したことを強調した。

- ①人材の募集と育成、②宇宙ドクトリンの作成、③独自予算の組み立て、④戦力設計、⑤部隊の体制確保、⑥統合作戦部隊への戦力提供



Gen John W. Raymond,  
Chief of Space Operations

また、米宇宙軍のコア・バリューとして、①結合 (Connection)、②性格・気質 (Character)、③勇気・大胆さ (Courage)、④覚悟 (Commitment) を確立するとともに、任務に焦点を当てた組織編制として、MC (Major Command)、デルタ、SQ (Squadron) で構成される3層のフラットな組織を構築した。

更に、ロケット打ち上げでは、2005年には世界で67機打ち上げのところ、バンデンバーグとケープカナベラルで25機を打ち上げた。今後数年間で、年間300機の打ち上げを予期し、13時間インターバルでの打ち上げができる等、能力が大幅に向上したことを強調した。

なお、レイモンド大將は本年11月をもって退役されたが、JAAGAの名誉会員として、日米友好に引き続き貢献いただけるとのことであった。

#### (2) スピーチ等

##### ア 「ロシアの軍事侵攻への対応」

米欧州・アフリカ空軍司令官のジェームス B. ヘッカー大將 (Gen James B. Hecker, commander of United States Air Forces in Europe - Air Forces Africa) はパネルディスカッションの中で、ロシアの軍事侵攻の抑止及び対処について、以下の認識を示した。彼は、在日米軍のJ3及び嘉手納基地司令を経験している親日家である。

- ・ロシアは世界の1/3の軍事力を持つNATOの分断を狙ったが、スウェーデンとフィンランドの加盟で逆にNATOが強化された。

- ・米、NATOはロシアの侵攻意図を事前につかんでいたが、軍事侵攻そのものを抑止するより、NATOとロシアの戦争に発展することを抑止することを重視した。

- ・相互に航空優勢を獲得できない状態では戦闘が長期化するとともに消耗戦化する傾向にある。

##### イ 「有人機と無人機のチーム化」

A-5部長、ヒノテ中將は、スピーチで以下の考えを示した。

- ・米空軍の現在の戦力設計は、直面する中国を抑止する要求を満たしていないため、革新的な作戦コンセプトの開発が必要であり、無人機はそのためのポテンシャルを有している。

- ・CCA (Collaborative Combat Aircraft) ファミリーによる人間と機械のチームングのダイナミックスは、対航空、精密攻撃などの効果的な遂行に極めて重要な役割を果たす。

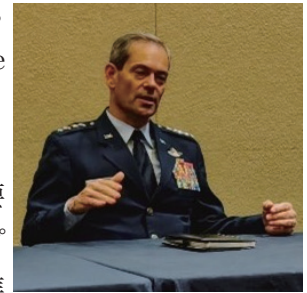
- ・今後5年間に500機近くの有人機を退役させるが、CCAは空軍の戦力設計を再構築するためのキーコンポーネントとなる。

- ・人間と機械の役割分担は、致命的な武力使用の判断は人間が行い、実行は機械が行うというもので、パイロットが操縦する機体に自律制御のCCAが随行し、危険なエリアでの攻撃等を行う場面を想定している。

#### 4 米空軍参謀本部等の部長等との意見交換

##### (1) PACAF司令官 ウィルスバック大將

PACAF司令部での議論を踏まえ、司令官との意見交換を実施した。司令官からは、PDI (Pacific Deterrence Initiative) の予算獲得状況と今後の見通し、これに基づくACEコンセプトの実行に必要な事前集積、滑走路・ランプ等の工事などの体制整備を進めていくとの説明があった。ACEコンセプトの考え方について、具体的な戦力運用要領、多機能隊員の必要性及び養成要領、A2/AD脅威圏内における飛行場数の確保等について司令官の考え方を確認することができた。



Gen Kenneth S. Wilsbach, PACAF Commander

特に、航空戦力の運用については、A2/AD脅威下においてスタンド・イン及びスタンド・アウトの両作戦を念頭において、戦闘機等はインサイド・フォースとして運用し、ISR機、空中給油機、爆撃機はアウトサイド・フォースとして運用することであった。ACEは既にIOC (Initial Operational Capability) を達成しているが、FOC (Full Operational Capability) は実戦環境下の様々な厳しい要件をクリアする必要があるため時間がかかるようであった。

日米でACEコンセプトを共有し、実行に移すためには、日米共同の指揮統制 (C2: Command Control) の整合を図る必要があり、検討の継続を要望された。

(2) 空軍参謀本部前任参謀 シュナイダー中將 (前在日米軍司令官)

シュナイダー中將からは、空軍参謀本部で取り組んでいる以下の事項について説明を聞くことができた。

CCAは、ケンドール長官が打ち出したコンセプトで、有人機と無人機の役割や連携、統制要領等の多様な議論を行っている段階であり、実証を通じてそれらを明確化して行く。最早、Royal Wingmanなどの目視範囲内で編隊を組む無人機という概念を越えて、別々の

飛行場から離着陸したり、E-7から指揮統制したりすることも念頭に置いた概念となっている。

戦闘機の主力はF-35であり、NGAD (Next Generation Air Dominance) は少ない調達数でCCAと共に有人機、無人機とチームを組むことを想定している。

また、ロシアのウクライナ侵攻について、米国としてはロシアとNATOの戦争にしないことが当初の方針であり、侵攻が始まってからは、エスカレーションの抑止や戦況のコントロールに成功しているとの認識が示された。一方、教訓として、①情報戦の重要性、②航空優勢について、相互に航空優勢の獲得を拒否した状況となっているが、航空優勢の無い戦いは①コスト増大、②長期化、③民間人の被害が拡大することとなる、との見解が示された。

(3) 統合参謀本部 J-4 コシンスキー中将 (前第5空軍副司令官)

統合参謀本部で策定中の Joint War Fighting Concept (JWC) について説明があった。中国のミサイル及びサイバー攻撃の脅威下で後方補給を実施するためには、後方補給拠点の分散を実施する必要があると考えていて、日米共同による後方補給の実施や、陸軍による後方補給支援コンセプト、Sustain Distribution OPS. を確立しつつあり、既に陸軍で訓練を開始している。



Gen Leonard J. Kosinski, Director for Logistics, JCS

また、米地域別統合軍に編成した DDOC (Deploy and Distribution Ops. Center) の紹介があり、CENTCOM には1,000人規模のセンターが既に機能しており、インド PACOM には、立ち上げたばかりで未だ40人程度であるが、同センターがACEなど様々な作戦の後方補給を統合で機能させる構想で、将来的には日米でこの機能を確立したいとの考えであった。

(4) その他

ABMS (Advanced Battle Management System) 担当の J. バレンシア准将との懇談では、JADC2 及び ABMS 開発の進捗状況を確認することができたが、今年12月に実験 (Shadow Experiment) を実施し、翌1月に指揮・統制サミットを予定しており、同盟国、パー

トナー国への報告を継続していくとのことであった。また、彼からも日本のC2について議論を進める必要があるとの認識が示された。

A2/6 副部長の E. ブレイ氏からは、ターゲティングの実施要領について説明があり、質疑応答を実施した。

## 5 スティムソン研究所における意見交換及び公開セミナー

スティムソン研究所において JAAGA メンバーと米軍シニアリーダー及び研究者との意見交換及び公開セミナーを実施した。

意見交換には、ハーバート J. カーライル元太平洋空軍司令官、グレッグソン元第III海兵遠征軍司令官、ニコルソン元第III海兵遠征軍司令官、並びに研究者等が



Seminar "Deepening U.S.-Japan Alliance Cooperation in the Face of Global Challenges" at Stimson Center

参加し、ロシアのウクライナ侵攻の教訓とアジア太平洋地域への影響について討議した。

### ・抑止について

ロシアのウクライナへの軍事侵攻が抑止できなかったのは、事前に全ての選択肢をテーブルに上げていなかったからとの見方があり、台湾事態を抑止するためには米国の「戦略的曖昧性」を変更すべきとの意見や、バイデン大統領の台湾事態への関与発言は、「明確性」に移行しているとの見方もあった。2012年に中国が東シナ海に防空識別区の設置を宣言した時に、これを抑止する方策として、太平洋空軍がB-52を当該エリア内を飛行させ、中国指導者にメッセージを伝えたことが紹介された。

### ・航空優勢について

ロシアのウクライナ戦争では、ウクライナがロシアに航空優勢をとらせず善戦しており、航空優勢を取れない戦い方が、大規模な攻勢作戦により航空優勢を取りに行くよりも優れた作戦であるとの意見と、航空優勢の無い戦いは戦争が長期化し、民間を含めた被害が大きくなる、と言った意見が併存した。

### ・後方支援について

ロシアのウクライナ侵攻ではロシア後方支援はうまくいかず、ウクライナはロシアの後方部隊をうまく攻撃している。また、ロシアは精密誘導弾を撃ち尽くし、弾薬の備蓄量の不足を露呈している。太平洋地域にお

ける作戦においても後方補給が鍵であり、ACE コンセプトを実行するためには、後方補給の分散や事前集積が必要となり、中国軍が着上陸するためにも膨大な後方補給が必要となることが確認された。

公開セミナーは、杉山団長とグレグソン氏が登壇し、辰巳女史の司会進行により行われた。セミナーの様子は、YouTube で配信されているので参照されたい。(https://www.stimson.org/event/deepening-us-japan-alliance-cooperation-in-the-face-of-global-challenges/)

## 6 日本刀返還式

AFA メンバーであるカーショウ夫人が、遺族から引き継いだ日本刀を日本に返す方法を探していることを知ったライト AFA 会長が、駐在武官を通じて JAAGA に対して返還のための支援を依頼し、AFA と JAAGA の連携により返還が実現することとなった。

式典は、AFA 及び在米日本大使館の支援を受けて執り行われ、太平洋戦争後に米国に渡った約 600 年前の日本刀は、70 数年の時を経て故郷である岡山



るようなところがあり、エスカレーションの危険があり、事態に備える必要性があるとの認識を示された。



JAAGA members make a courtesy visit to Mr.Koji Tomita, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of Japan to the United States of America

## 8 おわりに

JAAGA 訪米事業は毎年継続して実施することにより、年々参加者は変わりつつも日米空軍種間の信頼関係の維持、強化に重要な役割を果たしてきた。我が国を取り巻く安全保障環境の厳しさが増し、日米同盟の強化が必要とされる今日、現役同士の連携が強化されていくのはもちろんのこと、それをサポートする本事業はより実務的な役割を果たすことを求められることが予期され、一昨年の訪米中止、昨年の海外渡航制限下での実施を経験しながらも、今回 3 年ぶりの訪米事業を成功裏に実施できたことは、今後の訪米事業の継続にとって大きな意義があったと考えている。

また、今回新たにスティムソン研究所における情報発信を実施するとともに、AFA との連携により日本刀の返還を実現する等、新たな活動に挑戦したが、今後とも求められる役割を果たしていくために、積極的に活動の幅を広げていく努力が必要ではないかと考える。

最後に、JAAGA の訪米を現地で支えてくれた、太平洋空軍の奥村 1 佐以下の連絡官による支援、在米日本大使館の防衛駐在官である菅井将補以下の駐在官による支援、並びに渡航準備に対する航空幕僚監部による便宜供与等は本事業の実施に必要不可欠なものであり、心より感謝を申し上げるところである。

(武藤副理事長記)

The Japanese sword "FUYUHIRO" returns  
JAAGA President Sugiyama Yoshiyuki (left) and AFA President Bruce A. Wright (right)

ライト AFA 会長と杉山 JAAGA 会長は、リマークスの中で、この返還式を通じて日米両国の強固な同盟関係と絆が証明され、AFA と JAAGA の絆も強まったと返還の意義を強調した。

日本刀返還の詳細について後掲〔「<sup>ふゆひろ</sup>冬廣」、備前に帰る～日本刀返還のキセキ～〕をご一読ください。

## 7 富田駐米大使表敬訪問

在米日本大使館において、富田駐米大使を表敬訪問し、米国の最新情勢などについてご意見を拝聴した。

日米関係については、グローバルな戦略競争におけるパートナーとして、並びに中国への対応は米国単独では出来ないことからそのギャップを埋めるため、日本への期待が大きくなっており、その役割を果たすためには、年末に策定される戦略 3 文書を実行に移すことの重要性を強調された。

米中関係については、最近の米国は中国を試してい

# 「冬廣」、備前に帰る ～日本刀返還のキセキ～

JAAGA helps to return the Japanese sword "Fuyuhiro"

軌跡を辿っていくと、事は2020年月にライト氏 (Lt Gen (Ret.) Bruce A. Wright, President of Air Force Association) 宛てに AFA の支援者であるカーショー夫人 (Mrs. Ginny Kershaw, Col Robert Kershaw's wife) から手紙が届いたことから始まる。カーショー夫人は2000年頃に他界した夫から一振りの日本刀を託されており、その手紙にはどうかこの日本刀を日本に返す手助けをして欲しいと書かれていた。

シアトル在住の同夫人は、それまで在シアトル総領事館、在米日本刀協会、米空軍博物館、AFA 会長 (当時 Gen (Ret.) Dunn) など様々な財団、美術館等に日本返還を打診するも返還は実現しなかったとのこと。その手紙を受けて早速、ライト氏



The Japanese sword "FUYUHIRO" returns

は在米日本大使館の防衛駐在官に連絡し、返還の検討を試みたが適切な方法が見当たらなかった。考えあぐねている中、助けを求めて旧知の永岩俊道氏 (元空将、当時 JAAGA 顧問) に相談したところ、この「日本刀返還」を通じて日米の絆を強めるという趣旨で賛同を得ることができ、様々な検討を経て福江 JAAGA 副会長を責任者として、2020年秋のつばさ会/JAAGA 訪米団事業に併せて日本刀返還事業を実現する運びとなった。

しかし、やっと返還に至るかと思いきや、その頃に新型コロナウイルス感染症が瞬く間に全世界に広まり、それから後2年間日本刀返還事業は実施を見送らざるを得なかった。したがって、今回「在米日本刀の返還協力事業」として返還実現に至ったことは関係者として感慨深いものを感じている。

当該日本刀は、銘は「冬廣」、つば鑄は「忠時」の拵えの600年前の古刀であるとのことであり、カーショー夫人の夫の両親が1954年に日本から持ち帰ったもので、元の所有者は不明とのことの手紙には付言されていた。

1945年9月、当時日本を占領していた連合国軍 (GHQ) は、日本の武装解除の一環として日本全国に刀剣などの武器類の提出を命じ、警察署を通じて集め

られた数十万振りの刀剣類の大部分は海洋投棄され、一部の刀剣類は投棄されずに米陸軍補給所 (東京・赤羽) に集積された。それらは通称「赤羽刀」と呼ばれていたが、その一部が米軍人によって日本から米国に持ち出されていた。

1947年ころからは日米関係者の努力もあって日本刀返還事業が開始され、美術的価値の高いものの中で一部は所有者または遺族の元に返還されているが所有者不明の刀剣類は返還手続きができないままか既に日本にあるものは公立博物館に無償譲与されている。

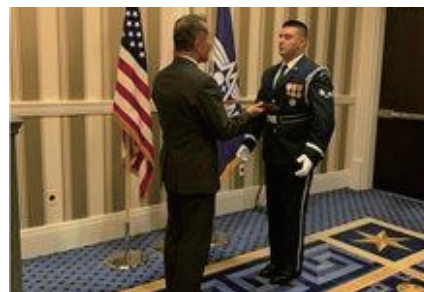
当該日本刀「冬廣」はどのような経緯で米国に渡るようになったのかの詳細や元の所有者も不明であるものの、刀剣専門家の鑑定では室町後期の古刀であり経緯から「赤羽刀」ではないとのこと



Confirmation of the artistic value of the Japanese sword

が判明した。当該日本刀の返還に当初から関わった面澄江氏 (日本美術刀剣協会員) 等との協議も含めて JAAGA 内で検討し、刀剣の適切な維持管理環境であるという観点から、岡山県瀬戸内市 (旧備前国) にあり「日本刀の聖地、とも称される「備前長船刀剣博物館」に寄贈し管理委託することとなった。

ワシントンにおける日本刀返還式では、JAAGA 杉山会長、つばさ会/JAAGA 訪米団各員、在米日本大使館職員、米側は、米空軍参謀総長ブラウン大将 (Gen C.Q.Brown, Chief of Staff USAF) ご夫妻、米宇宙軍作戦部長レイモンド大将 (Gen John W. Raymond, Chief of



President Sugiyama receives "FUYUHIRO"

Space Operations) ご夫妻、ウィルスバック大将 (Gen Kenneth S. Wilsbach, Air Component Commander for U.S. Indo-Pacific Command) ご夫妻、AFA ライ

ト会長ご夫妻をはじめ、シュナイダー中将 (Lt Gen Kevin Schnider, Chief of Staff, USAF HQ) (前在日軍司令官、現米空軍参謀本部幕僚長)、AFA 評議委員長マーリー氏 (元在日米軍最先任上級下士官) が参加し、「REPATRIATION CEREMONY- FUYUHIRO JAPANESE SWORD WITH A TADATOKI GUARD」と銘打って盛大に行われた。



The momentous ceremony is attended by prominent U.S. Air and Space Force leaders, in addition to JAAGA delegation representing JASDF and AFA's Chairman

日本刀返還に関わる関係者の労をねぎらい、改めて日米同盟の強固な絆を確認する記念すべきセレモニーとなった。冒頭のスピーチで米側のアクションオフィサーであるライト氏は「日米は戦争という歴史を克服し、最も親密な同盟関係を構築した。この日本刀の返還が、時代を越えた日米の戦士間の絆と日米同盟の永遠に続く友情の象徴となる。」と述べた。



Air Force VIPs and officials from both Japan and the United States are participating in the ceremony

日本刀「冬廣」の新たな所有者となった杉山 JAAGA 会長は「AFA の友人と米空軍・米宇宙軍のリーダーの同席を得て、日本刀が返還されることは日米の友情の象徴であるだけでなく、強固な日米同盟の証。日本刀に込められた侍の魂が日米両国の航空・宇宙の戦士の手によってその故郷に帰ることは AFA と JAAGA の素晴らしい関係の証でもある」とスピーチし万雷の拍手を受けた。

【今回の日本刀返還の流れ】

- ①日本刀返還米国チームの支援を得て、カーショー夫人 (シアトル) からライト氏 (ワシントン DC) に日本刀を送付
- ② 2022/9/19AFA 主催の「ASCC2022」会場のゲイロードホテルにおける日本刀返還セレモニーにおいてライト氏

から米空軍儀仗隊員の手を経て、杉山 JAAGA 会長に当該日本刀が手交され、同時に所有権もカーショー夫人から杉山会長に移譲

③当該日本刀を全日空 (株) 様のご支援を得て手荷物として成田空港に空輸

④ 9/24 成田空港税関において成田警察署職員の確認を受け当該日本刀を仮領置後に「引渡書」とともに受領

⑤ 10/22 東京都教育庁主催「東京都銃砲刀剣類登録審査会」

<池田理事が代行登録>

で審査され、「冬廣」銘の室町後期の

古刀であり美術刀剣に間違いがないことが証明され「登録証」受領

⑥ 11/5 福江弘明 JAAGA 副会長、池田五十二理事、日本美術刀剣協会面澄江氏により「備前長船刀剣博物館」(岡山県瀬戸内市) へ当該日本刀を携行し寄贈。セレモニーには、若松孝史博物館館長 (市文化観光課長) と博物館学芸員杉原賢治氏が参加



"FUYUHIRO" arrives at Narita Airport (Left), Tokyo Metropolitan Government Sword Registration Certificate (Right)



The Japanese sword "FUYUHIRO" is donated to the Museum Director Wakamatsu by JAAGA Vice President Fukue

以上、様々な困難を経て長年の念願であった「日本刀返還」が実現し、今後の JAAGA と AFA の絆の強化のみならず良好な日米関係に貢献することを大いに期待しているところであるが、この事業が関係各所、各位の多大なる熱意と努力の賜物であったことに「奇跡」を感じている次第である。

(池田理事記)



## レイモンド大将来日、昼食会開催

*A luncheon meeting is held during Gen John W. "Jay" Raymond visit Japan*

レイモンド宇宙軍作戦部長 (Gen John W. Raymond, Chief of Space Operations) の来日にあわせて、10月3日にレイモンド大將と杉山 JAAGA 会長との昼食会を築地「すしざんまい本陣」で実施した。

レイモンド大將は、後任が米国上院で承認されており、現役としては最後の訪日であり、防衛省、官邸、空自部隊訪問といった過密スケジュールの中で、ご本人からの要望での JAAGA メンバーとの昼食会であった。



Luncheon meeting with Gen John W. Raymond, Chief of Space Operations

当日は、米国側からレイモンド大將、フリーデル 5 空軍副司令官 (Brig Gen Jesse J. Friedel, Deputy Commander 5th Air Force)、ホルストン宇宙軍大佐 (Col Matthew E. Holston, Executive Officer to the Chief of Space Operations) を迎えて、今年度の JAAGA 訪米団を中心としたメンバーで昼食会は開始

された。

5 空軍副司令官時代の東日本大震災対処や6年間に及ぶ宇宙軍トップとしての勤務経験などの話題で昼食会は大変盛り上がった。

なお、レイモンド大將は、2010年12月から2012年6月の間、第5空軍副司令官として日本(横田基地)で勤務され米空軍と航空自衛隊の強い紐帯の実現に尽力いただいたご縁から JAAGA 名誉会員の委嘱を受けていただき、今年度の JAAGA 訪米時に名誉会員委嘱の盾が贈呈された。



Gen Raymond receives a plaque of HONORARY MEMBER from President Sugiyama

今回、親日家の現役将軍がまた一人退役となるが、今後とも JAAGA 名誉会員として日米両国の親善の懸け橋としてのご活躍を期待しております。

(前原理事長記)

## 第 374 空輸航空団司令官の交代式

*Commander the 374th Airlift Wing Change of Command Ceremony in Yokota AB*



Col Andrew L Roddan receives a guidon from Lt Gen Ricky Rupp, U.S. Forces Japan and 5th Air Force Commander during the 374th AW change of command (Photo by USAF)

6月23日(木)、米空軍横田基地において在日米軍司令官兼第5空軍司令官リック・N・ラップ中將 (Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan, and 5th Air Force



commander) の執行により第374空輸航空団司令官 (Commander of the 374th Airlift Wing) 兼横田基地

commander) の執行により第374空輸航空団司令官 (Commander of the 374th Airlift Wing) 兼横田基地

司令官の交代式が執り行われ、アンドリュー J. キャンベル大佐 (Col Andrew J. Campbell) からアンドリュー L. ロダン大佐 (Col Andrew L. Roddan) に指揮権が継承された。

JAAGA からは上ノ谷理事、岩崎理事、福永理事が出席した。受付会場の将校クラブで離任されるキャンベル大佐が出席者を



Director Kaminotani, Iwasaki and Fukunaga with Col Campbell, 374th Airlift Wing outgoing commander

出迎えられ、「2年間の在任期間

の友好と協力を深く感謝する」旨の挨拶を述べられた。交代式の会場は、通常は C-130 輸送機が格納される格納庫 (Hanger15) にステージが置かれ、天井から日米の国旗が吊り下げられ、ステージの正面に第 374 空輸航空団副司令官以下部隊が整列、左右に隊員家族

や招待者の座席が配置され、整列した部隊の後方 (格納庫の外) には第 374 空輸航空団司令官機の C-130J Super Hercules 輸送機が配置されていた。



The 374th AW change of command ceremony, June 23, 2022, at Hanger15 Yokota AFB

司令官一行が入場し、交代式は日米国旗掲揚・国家独唱から始まり厳かに進められた。離任するキャンベル大佐から司令官旗がラップ中將に手渡され、着任するロダン大佐がその司令官旗を受け取り指揮権が継承された。

執行官であるラップ中將から退任するキャンベル大佐に第 374 空輸航空団司令官としての功績に対して賛辞の言葉が述べられ、その功績に対して勲章が授与された。



Col Andrew Roddan, 374th Airlift Wing commander gives his statement

キャンベル大佐の離任の挨拶として、横田基地のメンバーへの謝意とエール「私たちが守る平和と安定は、臆病さから生まれるものではない。あなたの自由、私たちの自由は共



Col Andrew Roddan, 374th Airlift Wing commander, renders his first salute as commander (Phpto by USAF)

に果敢 (大胆) であることから生まれる。果敢 (大胆) に任務を遂行してください」が贈られた。それと同時に式に参列された奥様と御子息に対し感謝の気持ちを丁寧に伝えられたことが印象的であった。

新司令官のロダン大佐は、C-130E と C-130J の飛行経験を持ち、飛行時間 3,700 時間以上を有する操縦者で、前職ではアーカンソー州リトルロック空軍基地第 19 運用群司令官を務めた。新司令官として「私が

この場に立っているのは、これまで私を教え、導き、支援してくれた人々のおかげであり、今日の私を育ててくれた多くの人たち一人一人に感謝し、その努力に報いる所存である」と挨拶され、謙虚で誠実な人柄



374th Aircraft Maintenance Squadron dedicates crew chief unveils a nametape for Col Andrew Roddan, 374th Airlift Wing commander, on his C-130J Super Hercules (Phpto by USAF)

を感じられた。ロダン新司令官が司令官として最初の部隊の敬礼を受け、C-130J 司令官機のコクピット下に記される名前がロダン大佐に貼り替えられて披露された。

最後に「空軍歌」が熱唱されて司令官交代のセレモニーは終了した。

(福永理事記)



Director Kaminotani, Iwasaki and Fukunaga with Col Roddan, 374th Airlift Wing incoming commander

## 第 35 戦闘航空団司令官の交代式

Commander of the 35th Fighter Wing Change of Command Ceremony in Misawa AB



Col Jesse J. Friedel, 35th Fighter Wing, outgoing commander (right), passes the guidon to Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan, and Fifth Air Force commander (left)  
(Photo by USAF)



Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan, and Fifth Air Force commander (left), passes the guidon to Col Michael P Richard, 35th Fighter Wing, incoming commander (right)  
(Photo by USAF)

6月30日(木)、米軍三沢基地において在日米軍兼第5空軍司令官リッキー N. ラップ中將 (Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan, and Fifth Air Force commander) の執行により第35戦闘航空団司令官

(Commander of the 35th Fighter Wing) 兼三沢基地司令官の交代式が三沢基地格納庫内で執り行われ、第5空軍副司令官に転出するジェシー J. フリーデル大佐 (Col Jesse J. Friedel) からマイケル P. リチャード大佐 (Col. Michael P. Richard) に指揮権が継承された。



Col Jesse J. Friedel, 35th Fighter Wing outgoing commander smiles as he delivers during the 35th FW change of command ceremony (photo by USAF)



Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan, and Fifth Air Force commander (left), presents the Legion of Merit to Col Jesse J. Friedel, 35th Fighter Wing outgoing commander (right)

交代式には航空自衛隊や三沢

市などから来賓約300名が出席し、JAAGAからは池添三沢支部長夫妻、山本事務局長夫妻が参列した。

交代式は日米国旗掲揚・国家独唱から始まり厳かに進められた。

最初に、執行官であるラップ中將から、離任するフリーデル大佐に第35戦闘航空団司令として基地外住居の範囲拡大及び地元との日米交流親善に貢献した功績を称え、勲章が授与された。

次に、フリーデル大佐からラップ中將に指揮権を表す司令官旗が返還され、着任するリチャード大佐がその司令官旗を受け取り指揮権が継承された。

次に、リチャード新司令官が司令官として最初の部隊の敬礼を受け、第35戦闘航空団司令官用F-16戦闘機の名前がリチャード大佐に貼り替えられた。

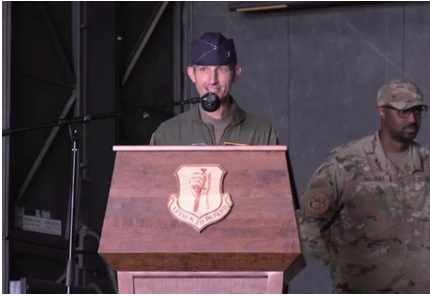
リチャード大佐は着任挨拶で「新

司令官としてみなさんの期待に沿えるよう最善を尽くす」と抱負を述べた。最後に、「空軍歌」が斉唱されて司令官交代式は終了した。



35th Aircraft Maintenance Squadron dedicates crew chief, unveils a nametag for Col Michael P Richard, 35th Fighter Wing commander, on his F-16

新司令官のリ  
チャード大佐は  
2002年に米国  
ノートルダム大  
学を修了して任  
官。ドイツのス  
パンダーレム空  
軍基地で飛行隊  
長を務めたほか、  
米国防省の計画・



Col Michael P. Richard, 35th Fighter Wing incoming commander, delivers a speech during the 35th FW change of command ceremony (photo by USAF)

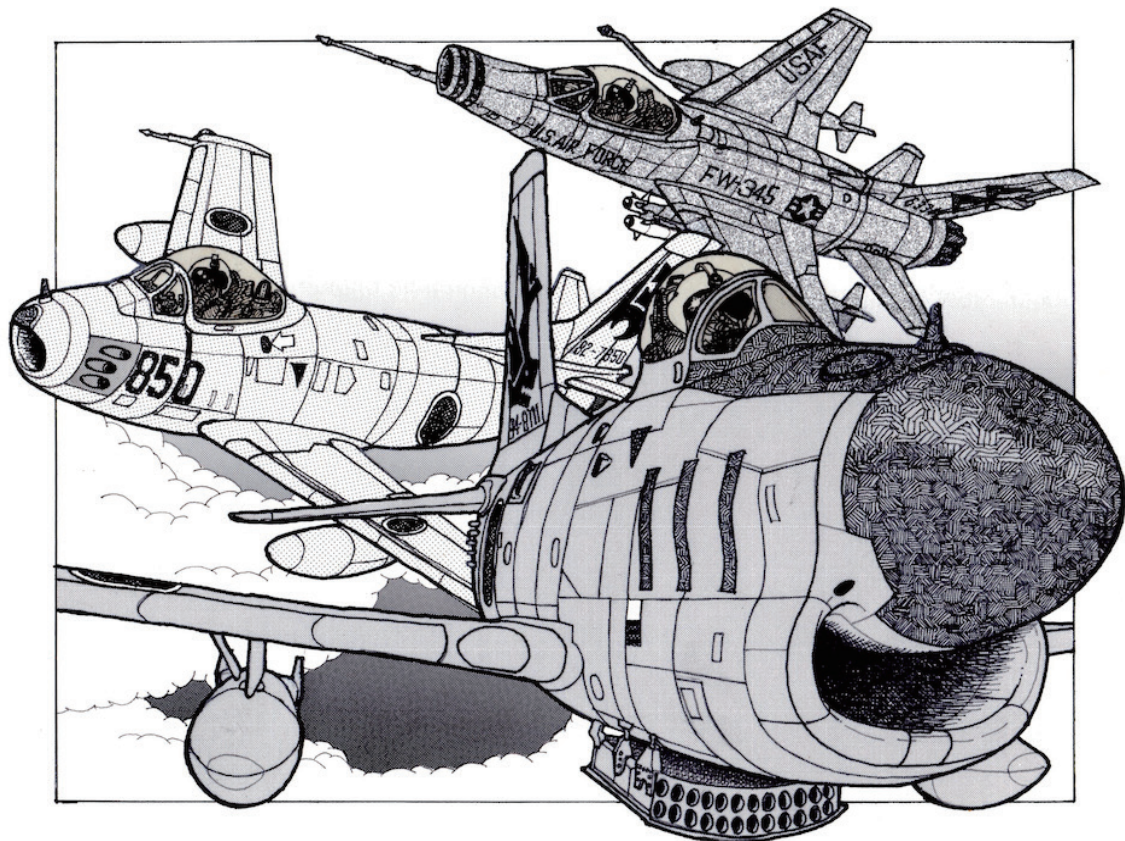
プログラム戦闘空軍部次長など歴任している。前職では韓国クンサン基地第8航空団副司令官を務めた。

これまでに搭乗した機種はF-16、T-6、T-38で400時間を超える戦闘任務を含む2,270時間の飛行経験を有する。



Mrs. Yamamoto (left), Mr. and Mrs. Ikezoe (right) with Col and Mrs. Richard, 35th Fighter Wing incoming commandar

(池添三沢支部長記)



往年の名機 旭光・月光・超

作：富岡幹博 会員

# 米空軍横田基地における日米相互特技訓練

## JAAGA supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program at Yokota AFB



昨年度の日米相互特技訓練は、コロナ禍の影響により3月22日(火)から25日(金)4日間の期間設定となり、米空軍横田基地において実施された。フェアウェル・パーティー等のイベントは中止されたが、受入れ側の第374空輸航空団からは、フレッチャー3等軍曹(SSgt Lewis, Fletcher)他7名が、空自側からは、中部航空方面隊司令部支援飛行隊渡邊2曹他6名が参加した。

空自隊員の航空機整備、空中輸送、警戒管制、通信、補給、施設特技に応じ、類似する業務を行う第374空輸航空団の職場に分かれて訓練が行われたが、隊員それぞれに米空軍対番者が付き、生活面も含めた親身な対応により、相互理解を深め大きな成果を得た。

以下に、米側の訓練計画等の概要と参加者所感、空自側参加者の所感を紹介する。

### ○ 航空機整備 1

【受け入れ部隊】 374th Aircraft Maintenance Squadron

【参加者】 SSgt Fletcher Lewis / 飛行点検隊 須田健一郎 3曹

【訓練概要】C-130Jの燃料補給、タイヤ交換、フライト前後の点検、シミュレーターにおけるエンジン始動等の訓練を実施

【所感】

**SSgt Fletcher Lewis...**

I liked being able to interact with someone from a different culture and background. It was interesting learning, not only about the differences between the USAF and the Japanese Defense, but also about SSgt Suda as a person. He is a very genuine, kind individual and was very eager and appreciative to learn. We were also able to meet up with some other participants of the program in different career fields and trade knowledge with each other which I thought was helpful as our jobs coincide with one another.

**須田 3曹...**

対番者フレッチャー3等軍曹と米空軍関係者の支援により、とても充実した訓練になりました。特に、部隊研修では日本語での説明や日本語で書かれた資料を準備して頂



くなど配慮していただいたおかげで、緊張感もすぐにほぐれ、充実した訓練となりました。第374空輸航空団では、C-130Jの整備作業（燃料補給、タイヤ交換、フライト前後の点検等）を研修し、自衛隊との差異を体験しました。特に米空軍は特技統合を採用しており、同職の航空機整備員がエンジン、電機系統の整備も担当している点に大変感銘を受けました。課外は、対番者が基地内の案内、食事を共にしたりと、楽しい時間を過ごせました。今回の訓練は単なる貴重な体験で終わらせるのではなく、我が部隊での整備能力、英語能力の向上に繋げる機会としたいと思っています。

最後にこのような発表の機会を与えてくださったJAAGAの皆様や支援してくださった部隊の方々に感謝申し上げます。

### ○ 航空機整備 2

【受け入れ部隊】 374th Maintenance Squadron

【参加者】 SSgt Nagasaki, Kevin / 中部航空方面隊司令部支援飛行隊 渡邊将士 2曹

【訓練概要】油圧系統、地上操向系統等の定期整備、機能確認等に係る訓練を実施

【所感】

**SSgt Nagasaki, Kevin...**



Having the chance of working with a member of the JASDF in the same career field was a great experience for my team and I learning about the differences in culture and background was very fun. TSgt Watanabe is a very kind and motivated individual. He was very eager to learn about the different things we do as well as sharing with us his own experience and different tips and tricks that he has learned in his 18 year career in the JASDF. Overall my team and I enjoyed the program and look forward to more chances to work with our allied partners in the future.

### 渡邊 2 曹…

数名程度しか参加できないという事前情報から、軽い気持ちで希望し、後に参加者に選ばれ驚きましたが「誰か 1 人くらいは日本語を話せる人がいるだろう」という気持ちで横田基地に向かいました。しかし、実際に訓練が始まると、米軍の導入教育から英語のみの会話、スライドも英語のみで、米軍の対番者も英語しか話せない方でした。もともと中学、高校で教わる英単語や文法程度の知識、能力しかない私は、早速英語しか使えない環境に 1 人で放り込まれたことにとつてもない不安を感じました。

油圧ショップでは、待機室の環境が整っており、休憩中は好きなテレビ番組を見ながらリラックスし、いざ作業となると集中して取り組む、という気持ちの切替えがしっかりと行われていると思いました。C-130J の整備作業では、同一特技の内容であり、聞き取りやすく話してくれたため、なんとか理解できましたが、特に安全管理の意識が高いと感じました。作動油に触れるときは耐油手袋の着用、工具でワイヤー等を切るときは目の防護のためゴーグル等を着用するなど、安全管理が徹底されていました。また、米軍は技術指令書 (TO) のデータをノートパソコンに入れて持ち歩いており、空自は簿冊にしていると話すに驚かれましたが、丁度パソコンのバッテリーが切れて TO が確認できなくなったため、お互いのメリット、デメリットがわかりました。他にも双方の違いを説明し合って相互理解を深めました。

簡単な英語は聞き取れたものの、親睦を深めることも含め、日米共同対処能力の基盤強化や現場レベルの相互理解を深めていく上で、英会話能力の向上の必要性を痛感するとともに、日米間の違いを身をもって感じたことで、今一度自分の固定観念や習慣を見つめ直すいい機会となりました。この経験を「貴重な体験だった」で済ませることなく、後輩達に伝えていき、自分自身も向上していくことで、少しでも日米同盟の強化に貢献していければと思います。

○ 個人装備品等整備・補給等

【受け入れ部隊】 374th LRS(Logistics Readiness Squadron)

【参加者】 SSgt Hendersen, Sean / SSgt Musnit Janel /

作戦運用隊 平沼知樹 2 曹

【訓練概要】 特殊武器防護装備を含む個人装備品等の整備・補給に係る訓練、最高度の特殊武器防護発令下の対応訓練を実施

【所感】

### SSgt Hendersen…

Being able to share this event with TSgt

Hiranuma was an amazing experience for everyone. He was very eager and engaged for us to show him all of our processes and life style within the USAF. We were all able to learn and grow in our respective fields while being able to compare the differences between our organizations. We were all able to bring something new to the table that we've never seen or thought of before. Additionally, listening to all of his experiences in his JASDF career and how they operate was very enlightening and interesting. Being able to share a bilateral event with our host nation was an amazing experience and we hope to attend this again in the near future.

○ 輸送機の運用等

【受け入れ部隊】 36th Airlift Squadron

【参加者】 SSgt Campbell, Toiannah / 第 2 輸送航空隊第 402 飛行隊 相馬直輝 3 曹

【訓練概要】 C-130J における物品搭載に係る訓練、空中投下に関連する施設等の研修、昼夜間の実投下に係る訓練を実施

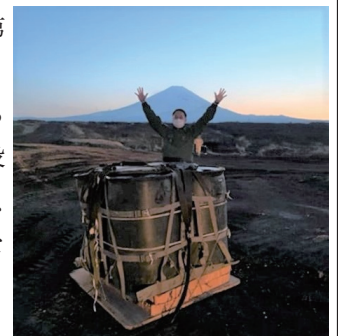
【所感】

### SSgt Campbell, Toiannah…

The NCO exchange was an incredibly invaluable experience for me. Interacting with my JASDF Loadmaster counterpart for a few days showed me that although we work on different aircraft, we operate similarly in a lot of ways. SSgt Soma was very eager to learn throughout the week. I was very grateful that we both took a lot from this experience. I enjoyed working with SSgt Soma very much.

### 相馬 3 曹…

私は空中輸送員として、C-1 輸送機と U-4 多用途支援機に搭乗して日々任務を行っております。本訓練には上司からの勧めで参加しましたが、当初は 1 人で見知らぬ土地に海外旅行に行くような不安がありました。しかし、参加経験のある空中輸送員の先輩が日米の懸け橋としてリーダーシップを発揮している姿を見て、自分もこの訓練に参加す



ることで何か変わることができると確信し、不安が期待に変わったことを覚えています。

研修先は第36輸送飛行隊で、対番者はC-17とC-130Jの搭乗経験があるLoadmaster (LM) で、指導員の資格を持つキャンベル3等軍曹でした。初対面で「こんにちは、よろしくお願いします。」と日本語で挨拶してくれたため、とても礼儀正しい方だとの印象を受け、また同時に今回の交流に対する真摯な姿勢が伝わり、私自身改めて気持ちが引き締まりました。飛行隊を案内されて感じたのは、若い隊員が多くとても活気のある部隊だということです。「どこから来たの?」「アメリカンフードを食べに行こう。」と声をかけてくれて、昼食に基地内にあるレストランへ連れていってくれ、正にアメリカを感じられました。

CMF (Combat Mobility Flight) 格納庫には物料投下訓練のための物料や器材が大量に準備されており、LMからの説明を受け、日本の訓練規模に比し、米空軍の訓練規模が圧倒的に多いことに衝撃を受けました。また、C-130JへのCDS (Container Delivery System) の機内搭載と点検においては、空自と同様に点検表を用いて正確かつ確実に業務を行っていましたが、練度や技術は空自の空中輸送員も少しも負けていないと感じました。

この訓練を通じ、英語学習と現場レベルでの交流の重要性を認識することができました。この訓練で構築した米空軍とのネットワークを活かして、日米の空中輸送員同士の交流の機会を自ら作り上げることで組織に貢献していきたいと考えています。最後に、支援して下さった部隊の方々に感謝を申し上げるとともに、この素晴らしい訓練を引き続き継続していただきたいと思います。

#### ○ 施設関連、滑走路被害復旧等

【受入れ部隊】 374th Civil Engineering Squadron

【参加者】

SSgt Brown, Jason / 中部航

空施設隊 中川教生 2 曹

【訓練概要】

建設物の確認調査、GPSを活用した調査や専用ソフトによる地図化、滑走路被害復旧に係る訓練、体力増強訓練等を実施

【所感】

**SSgt Brown, Jason**…

I really enjoyed learning about TSgt Nakagawa and what it's like to work in JASDF. There are a lot of similarities and differences between JASDF and the USAF that were very eye opening. It made me realize how the Japanese culture around us



really influences the culture on Yokota AB. I hope we're able to continue this program in the future.

**中川 2 曹**…

ジェイソン 3 等軍曹と共に行動してもらい、米空軍の任務に対する姿勢や考え方を習得することができた。同じ施設職域ながらも職務内容が異なったため、聞き慣れない英単語と格闘しながら説明を受けたり、持参した資料等を活用してパートナーに説明し、相互理解を図った。更に、実際に現場において一緒に作業等を実施し、航空自衛隊が保有していない資器材等の操作要領を習得することで、自身の特技能力の向上を図ることができた。自身の英語力が低かったため、うまくコミュニケーションが取れない状況もあったが、スマートフォンのアプリ等を活用したり、身振り手振りで表現することで意思疎通を図ることができた。

生活面においては、4日間米空軍の施設で生活し、食文化やライフスタイルに触れることができた。横田基地内における食事のすべてがインスタント食品やコンビニだったため、新たな食文化を理解することができた。また、パートナーの職場では、毎週月、水、金の朝から体力練成を実施していたので最終日だけ一緒に参加させてもらい、軽い筋トレと5km走を実施した。久々の駆け足でついでに精一杯だったが、みんなからの励ましにより無事にこなすことができた。

本訓練に参加したことで、英語に関する興味が沸き、今後更なる英語能力の向上に励みたいと感じた。今後、米軍と訓練する機会があれば、積極的に支援し、円滑に訓練が実施できるようにしたいと思う。

#### ○ 通信器材整備等

【受入れ部隊】

374th Communication Squadron

【参加者】

SSgt Young, Adam / 航空シス

テム通信隊 菅原義隆 3 曹

SSgt Kaolelopono, Preston / 航

空安全管理隊 田村政和 3 曹

【訓練概要】

各種通信器材の現地確認、器材整備に係る訓練等を実施

【所感】

**SSgt Young, Adam**…

We enjoyed the experience of having two amazing JASDF members shadow us for the week. As they learned our daily lives in Radio maintenance, we too have learned their respective lives, such as their difference in culture both on and off the job. They were very punctual and honestly very strict upon themselves; as



the week progressed we found out more about the work ethics of the JASDF itself.

They expressed that their work culture is more constringent and they were happy to have experienced our work culture. We enjoyed this chance to have worked with our respectful JASDF counterparts and now appreciate more of the importance of our joint relations with Japan and their military.

### 菅原 3 曹…

対番者のアダム 3 等軍曹は、主に無線装置の保守整備を担当しており、取扱う装備品の整備方法や使用用途について、実機を使った実演での説明により、米空軍の通信器材に関する知識が深まった。

通信器材の整備訓練等を通じ、「言葉の壁」と「業務の進め方」の違いを感じた。「言葉の壁」は想像以上に大きく、会話は英語のテストとは違う能力が必要であると痛感したが、反面、単語やジェスチャーにより意思が伝わる場面もあり、伝えようとする熱意の大切さも感じた。米空軍側からの積極的なコミュニケーションにも助けられた。「業務の進め方」については、朝礼時に誰がどの仕事を担当するかを議論して決定し、異議がなければ任務に向かう方法を採用していた。文化の違いからか、就業時間の合図もなく、各々が仕事と休憩を自由に設定したり、上司の前でガムを噛みながら手をポケットに入れ、机に寄りかかって報告する場面もあり、姿勢や過程よりも目的達成や結果を重視されているように感じた。また、様々な質問が飛び交いコミュニケーション能力が高いと感じるとともに、拙い英語や文法が変でも何かを伝えようとする姿勢が歓迎された。

今後、同盟国として連携を強めていく中で、実務レベルの隊員同士が交流して相互理解を深める利点は大きい。全隊員がこの素晴らしい体験をするべきであると思う。もし英語が苦手な敬遠している者がいるとすれば、私も訓練中にお世話になった翻訳アプリも武器の 1 つとして携えるというのはどうだろうか。

### 田村 3 曹…

本訓練において、私は特に、2つの点に大きな感銘を受けました。それは「職場環境の風通しのよさ」及び「オンとオフの適切な切り替え」です。

職場内において、上司と部下間のコミュニケーションが活発に行われており、「職場環境の風通しのよさ」を感じました。上司が職場内を歩き回り、気軽に部下に声をかけ、カジュアルな会話から業務のことまでデスク周りで畏まらずに話している様子でした。また、上官に対し部下が自分の意見を明確に主張していました。お互いがプロジェクトをよりよく実行するための一員であるという意識が感じられました。こういった要素を持っているため、判断力や行動力の高さに結びついているのだろうと思いました。また、ミッションやミーティングを実施する「オン」時と、何もない「オフ」の状態とを瞬時に切り替え、業務に集中している姿が印象に残りました。ミッションが始まると瞬時に雰囲気が変わり、準備からミッション遂行まで能率的に行動しており、その動作に無駄はなく、報告等も細かく実施されていました。しかし、彼らは終始集中している訳ではなく、業務の間にも待機中にはユーモアを入れ、緊張感やプレッシャーによるミスを犯すような雰囲気はありませんでした。彼らはあらゆる業務においても楽しむ心を持ち合わせているようにさえ感じました。

自衛隊においても切り替えの早さと業務の遂行能力は引けを取っているとは感じませんが、楽しむ心という点は感じたことのなかった考えでした。真面目に集中し、失敗をしないよう業務するだけでなく、こうしたらもっと良くなるのではないかとこの仕事を楽しむ心を持って業務に邁進していきたいと考えさせられました。本訓練において感じたことを自分の身の周りの所作に適切に応用し、上司・部下とのコミュニケーションの円滑化及び風通しの良い職場の風土醸成に活かしたいと考えております。



令和 4 年度においては、コロナ禍で減じられた訓練機会が復活し、更に充実した訓練となるように期待したい。

(太田理事記)



# 令和4年度 JAAGA 横田基地等研修

JAAGA members' Visit to Yokota AB on October 5th, 2022



Group photo of JAAGA Study Tour Members

## <全般>

10月5日(水)、3年ぶりの横田基地研修が実施された(正会員4名、個人賛助会員12名、法人賛助会員16名、理事4名、計36名)。計画の柔軟な運用により研修はスムーズに進行し、米第5空軍及び航空総隊への理解を通じて防衛意識をより高めるとの目的を果たすことができた。時折り小雨が降ったものの研修中傘を差すことはなかった。

## <結団式>

9時、JR福生駅にて受付開始。この時間帯の青梅線はほぼ10分おきに到着し、参加者がひと固まりとなっ



Inaugural meeting at Fussa st.

て集まったが、大岩財務理事が手際よく受付を行っていた。駅東口のペデストリアンデッキには数十人が展開できる広場があり、集合場所には最適である。

9時20分、結団式開始、今瀬会員理事より林団長(正会員)、秋山副団長(個人賛助会員)、鈴木副団長(法人賛助会員)はじめ各参加者が紹介され、団長の「在日米空軍について学ぶ良い機会です」との挨拶で式は締めくくられた。

バスの出発は手違いにより、30分遅れの10時であったが、時程の各所に休憩時間を挟んでいたため、この遅れは午前中のうちに解消することができた。

第5ゲートより入門、入門チェックは車内でMPに身分証を提示するだけの簡単なものだった。「研修団

がバスで入る場合、チェックは簡略化されているんですよ」と隣席に説明している研修者もいた。

## <第5空軍司令部VIP表敬>

10時10分、第5空軍司令部庁舎に到着。団長、副団長、武藤副理事長が第5空軍参謀長ダニエル A. ロッシュ大佐(Col Daniel A. Roesch, 5 AF/Chief of Staff)を表敬した(第5空軍A3/A5部長バン T. タイ大佐(Col Van T. Thai, 5 AF/A3/A5 Director)同席)。30分間にわたって懇談が行われ、「国を離れて世界平和に貢献している米軍に敬意を表します」「日本からは家族支援も含めて温かい待遇を受けています」等のやり取りがなされた。



Courtesy call: (from left) Deputy Tour Leader Mr. Akiyama & Mr. Suzuki, Tour Leader Mr. Hayashi, Col Roesch, Col Thai and Vice Chairman Muto

## <コマンドブリーフィング>

「2分間ビデオ」により第5空軍の部隊編成、各地への展開等の説明を受けた後、質疑を含めて約1時間ロッシュ大佐より概略次のような講話を頂いた。

「在日米軍司令官兼第5空軍司令官リック・N. ラップ中将 (Lt Gen Ricky N. Rupp, Commander, US Force Japan & 5 AF Commander)



A briefing on the outline of 5th AF

は、米宇宙軍作戦

部長ジョン W. レイモンド大将 (Gen John W. Raymond, Chief of Space Operations, U.S. Space Force) の来日に合わせて本日不在であり、本官が研修のホスト役を務めている」「作戦部長の訪日から、米軍が日本との関係を重視しており、とりわけ宇宙分野に関心を寄せていることが明らかであろう」「宇宙分野における日本の行動には更なる迅速性が求められるのではないだろうか」「昨日、北朝鮮がミサイルを発射、ロシア、中国はサイバー攻撃に着手していることなどから、緊密な日米関係がアジア太平洋地域の安定に不可欠である」「第5空軍は多くの役割と任務を担っており、士気は高く、任務のやりがいを感じている」

研修者からの「横田基地の役割はなにか」との質問には、「アジア太平洋地域の空軍ロジスティクスの中核である」と回答された。

#### <昼食会>

12時から1時間、横田基地オフィサーズクラブにてJAAGA主催の昼食会が行われた。円形の各テーブルに3～4名ずつ15卓。米軍・航空総隊からの参加者は計17名で、研修者と交流できるよう配席されており、参加者たちは食事と歓談を楽しんでいた。

#### <航空機見学>

滑走路のエプロンに、V-22 オスプレイとC-130J スーパーハーキュリーズが見学者用に並んで置かれており、それぞれ2名



Study of V-22 Osprey

ずつのパイロットが説明役として付いていた。

研修者から「オスプレイとヘリコプターとでは、どちらの操縦が難しいか」との質問がとび、「自分はヘリから転換したが、コンピュータ援助もあり、オスプ

レイの方がはるかに簡単である」との答えが返ってきた。一般的に固定翼機よりも回転翼機の方が操縦が難しいと言われている上、オスプレイは完全自動操縦可能であり、そのためもある。

「C-130は多数の派生型があるが、その理由は」との質問には、「主としてエンジンとアビオニクス機の換装である」との回答だった。見学した機体には釣り下げ型ホログラフ式 Head-Up Display が装備されており操縦性が向上していた。

見学後、バスは時間調整を兼ねて滑走路脇をゆっくり進んだ。C-17とC-5が駐機されており、機種に詳しい研修者が周囲の者に「あれがC-17、あれがC-5」と説明していた。

昭島市や福生市の上空をよく小型の双発ジェット機が低空で飛行している。決まったコースを飛んでいるので、バスの運転手(日本人)にアマチュアが飛行訓練でもしているのかと尋ねたところ、都内遊覧飛行のツアーがあるとのことだった。

#### <航空総隊司令部>

15時、航空総隊司令部庁舎に到着。検温、アルコール消毒、情報記録器機一時預けの後、作戦会議室へ案内され、防衛課長杉谷1佐より航空総隊の概況説明を受けた。中国空軍の活動が活発化する中、航空自衛隊と米空軍との共同訓練は盛んに行われており、特に2013年に航空総隊が横田に移転したことも連絡調整を含めて良好な関係構築に役立っているとのことであった。

続いての司令官内倉空将の講話は、「スライドが多いから、瞬きしているヒマはありませんよ」とのジョークに始まり、国際関係から狭義・広義(経済)の安全保障、災害派遣、コロナ対応にまで至る非常に多彩な内容だった。「"Koku-Jieitai"運動(米軍に航空自衛隊の呼称を"JASDF"ではなく、"Koku-Jieitai"とさせるもの)は定着しており、米軍との関係は良好である」「プロは結果がすべて 努力賞はない」「水天一碧(青々とした空と海とが遠い海上でひとつづきとなっている様)一国土を守る」とお話を締められた。講和に感銘を受けた研修者からは、司令官の降壇時はもとより、退室される際にも拍手が起こるほどであった。

16時30分、研修団が隊庁舎を辞する際、司令官以下、幹部の方々が玄関先で手を振って見送ってくださり、バスの中で研修者は皆恐縮していた。

### < 解団式 >

17 時、解団式が朝と同じ場所で行われ、武藤副理事長の「日米の緊密な連携が感じられました」との挨拶の後、団長と副団長が「たいへん有意義な研修でした。研修を用意いただいた JAAGA の方々に感謝します。



今回、JAAGA 主催の研修に初めて参加させていただきました。

私は約 10 年前より、横田基地周辺である昭島市に住み、また、勤務先である IHI 瑞穂工場は横田基地のフェンスを挟んで隣りに位置しており、プライベートでも仕事でも横田基地に密接した中で生活しています。

日々、C-130、CV-22 を中心とした訓練飛行が実施されており、その光景を間近に見ていましたが、どのような思いで日々の訓練に従事されているか、これまで、直接お話を伺うことができませんでした。今回、研修の中で、“日本を守るという強い思い”をもって、航空自衛隊も米軍も協力して任務にあたっていることを聞くことができ、大変有意義であったと思います。特に“Koku-Jieitai”運動のお話は、自衛隊と米軍との密接度を表す興味深いお話でした。

C-130、CV-22 の機体見学においては、各機体の搭乗員の方から機体の説明を実施いただき、機体の特徴や運用上注意していることなど知見を深めることができました。また、友好祭では見学者が多く、ゆっくりと機体を見ることはできませんが、今回は時間の許す限り機体の隅から隅ま



ありましたが、横田基地の訪問は初めてであり、とても有意義な時間となりました。

第 5 空軍研修におけるブリーフィングでは任務や部隊紹介だけでなく宇宙軍の活動やサイバーセキュリティに関する活動などとても興味深いお話を伺うことができました。ブリーフィング後は米軍が保有する C-130J スーパーハーキュリーズ及び CV-22 オスプレイのコックピット内部まで見学させていただき、非常に貴重な経験をさせていただきました。また、実際に機体を扱われているパイロットの

皆様も今日の貴重な体験を家庭や職場で共有してください」と所見を述べられました。

米第 5 空軍・航空総隊司令部の担当者はじめ研修をご支援くださった関係各位に御礼申し上げます。

(竹内理事記)

### 研修所感 法人賛助会員 (株)IHI 航空エンジン技術部 鈴木 一弘

で見学することができ、とても有意義な時間でした。

米軍側からの説明の中で、“ぜひ、今回の研修で得たことを周りに伝えてほしい”とのコメントがありました。確かに、周辺地域では航空機の騒音問題等が取りざたされていることありますが、昨今の北朝鮮のミサイル問題、ロシア-ウクライナ情勢を見据えると、航空自衛隊と米軍とがより密接に協力していくことが求められてきていると私は思います。日々、どのような思いで米軍の方々が日本で任務にあたられているか、その思いをぜひ、基地の近隣に住む周りの方々に伝えていきたいと思います。

また、航空総隊司令官内倉空将の講話でお話しいただいた 3 つの C (“Capability” “Connectivity” “Challenge”) は自衛隊を支える民間企業の一員としても非常に興味深いお話で、国防を支えていくために企業側としても、能力をあげ、官側と密接に協力し、新たなことにチャレンジしていくことを念頭に日々の業務に邁進していきたいと思えます。

最後に、今回の研修の企画・運営をされた JAAGA の皆さま、日々の任務で忙しい中、温かく研修を受け入れていただいた、航空自衛隊・米軍の関係者の皆さまにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

### 研修所感 法人賛助会員 沖電気工業株式会社 林 博輝

今回初めて JAAGA 研修に参加させていただきました。仕事柄、航空自衛隊基地の訪問や自衛隊の機体を拝見する機会

生の声を聴かせていただき C-130J、CV-22 の有用性や安全性について再確認することができました。

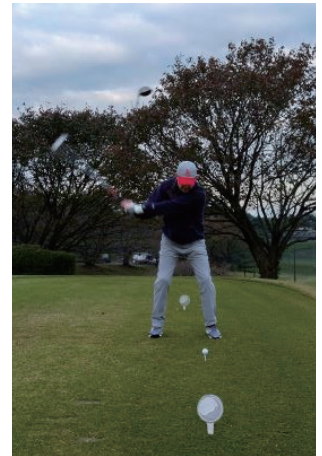
航空総隊司令部におけるブリーフィングでは部隊の任務や日本の安全保障環境等についてご説明いただき、年間のスクランブル発進の回数等を知ること、航空自衛隊の日々の活動によって日本の領空が守られていることを改めて実感いたしました。

本研修を通じて、日本を取り巻く安全保障環境の変化に対する日米連携の重要性を再認識するとともに、防衛産業に携わる者として微力ながら日本の安全保障へ貢献していきたいと考えました。

最後に、不安定な国際情勢の中このような機会をいただき、関係者の皆様には心より感謝申し上げます。

# SPORTEX '22-A

JAAGA holds SPORTEX '22-A, JAPAN-U.S. friendship golf athletic meet on October 28th



Beautiful Tee Shots ! President Sugiyama (left) and Col Setaka (right)



10月28日(金)、JAAGAゴルフコンペ「SPORTEX '22-A」が多摩ヒルズゴルフコースにおいて開催された。「オミクロン株の亜種」による爆発的な感染が落ち着き、行動制限なども緩和される状況とはなったが、前回同様、最大限に感染防止に配慮した「ウィズ・コロナ」形式で、一同に会する開会式・表彰式等は実施せず、「五月雨式プレー進行」により開催された。

年齢差で惜しくも第3位 (GRS 95 HDCP 20.4 NET 74.6) となり、ベストグロスは、JAAGA側は新規入会の有村さん (GRS 79)、米空軍側はミサさん (GRS 89) であった。

クラブハウス等の改修工事が来年2月までの予定で行われており、参加者は仮設テントでの受付、仮設のカート駐車場やトイレといった、いつものとは違うロ



Open-air Reception beside the Temporary Club House

ケーションや行動要領にやや戸惑いつつも、関係理事・ボランティアの案内・助言等により整齊とプレーに臨むことができた。

コンペ実現に尽力された理事各位、今回もボランティアとして運営を支えていただいた大岩理事及び上ノ谷理事、そして多摩ヒルズゴルフコース関係者の方々に深く感謝を申し上げたい。残念ながら、今回も「ウィズ・コロナ」でのコンペ実施となったが、参加者が一同に会し、ゴルフ談議に花を咲かせ、始球式や表彰式で大いに盛り上がるコンペが復活することを切に願う。



Tee off Call at 0700 by Director Araki

今回は、杉山会長はじめ JAAGA 側 27 名 (正会員 23 名、個人賛助会員 4 名)、前第 5 空軍司令部幕僚長セトカ大佐 (Col Dominic Setka) はじめ米空軍側 12 名、総勢 39 名が「密」を回避しつつ、熱気あふれるプレーで親睦を深めた。

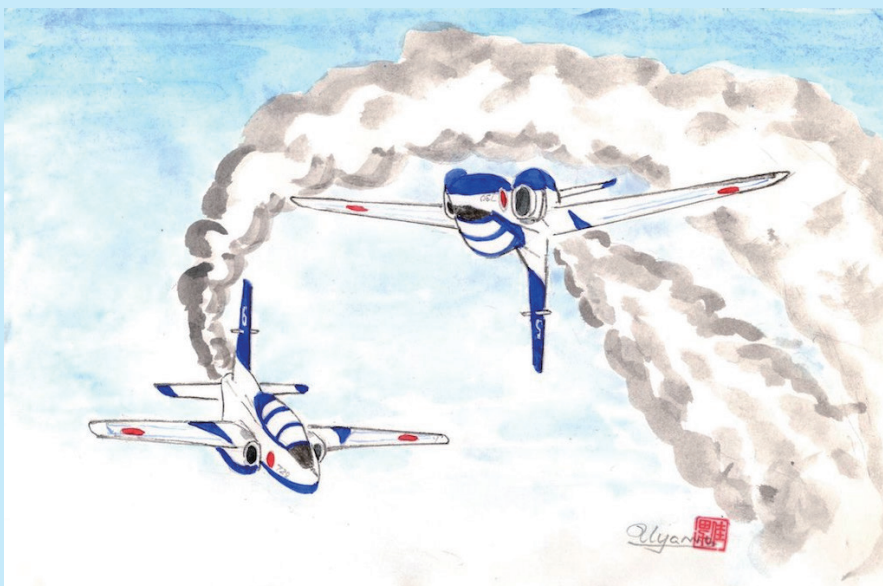


(太田理事記)

競技結果は、新入会員の有村さんが優勝 (GRS 79 HDCP 8.4 NET 70.6)、ミサさん (Mr. Don Misa) が準優勝 (GRS 89 HDCP 14.4 NET 74.6)、小出さんが

*OUT START 21 Members 6 Parties*

*IN START 18 Members 5 Parties*



*"CORKSCREW"*  
*Blue Impulse*  
作：宇山佳男 OB

# 米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

## 第5術科学校

5th Technical School

Maj James A. Peterson



初めまして、私はジェームズ・アンドリュー・ピーターソン少佐と申します。私は現在、愛知県の小牧基地にある第5術科学校第1教育部の一員として、航空自衛隊の教官と共に兵器管制幹部の教官を務めています。

私には妻と4歳の娘がいて、小牧とその周辺地域をホームグラウンドとしてから、もう3年近くになりますが、私の日本での任期はもうすぐ終わりを迎えるようとしています。

最初に私自身と私の軍歴について簡単に紹介し、次に第5術科学校の任務とここで過ごした時間についていくつか紹介したいと思います。

私は、米国中西部にあるコロラド州フォートコリンズの町で生まれ育ちました。フォートコリンズは、ロッキー山脈のふもとに隣接する大学の町です。山に囲まれて育ったので、私はいつも、ハイキングやサイクリング、キャンプ、スノーボード、その他多くのアウトドアアクティビティを楽しんでいました。そのため、自然豊かな愛知県北部での生活をとても楽しんでいます。

同じ町のコロラド州立大学に通い、電気工学を専攻しました。私は幼い頃から軍隊に興味があったので、予備役将校訓練課程(Reserve Officers' Training Corps, ROTC)プログラムを通じて空軍に入隊することを決めました。このプログラムは大学に通いながら履修することができ、週二回の軍事教育を受けることで卒業後に将校になる資格を得られます。2005年に

卒業し、その翌日には将校になりました。ここから、私の米空軍でのキャリアが始まりました。

任官時、軍用機の指揮統制を行う Air Battle Manager (ABM) に配置されました。フロリダ州ティンダル空軍基地での初級課程に参加し、その後、オクラホマ州オクラホマシティのティンカー空軍基地で E-3 早期警戒管制機 (AWACS 機) に搭乗して訓練を受けました。この訓練には合わせて、約1年半かかりました。米軍のさまざまな兵器体系、レーダーや無線の理論、指揮統制などの概念、そして戦闘機や爆撃機を管制する方法など、さまざまな種類の任務について学びました。

この訓練の後、私は AWACS で機上管制員のキャリアを開始しました。2007年から2010年までは沖縄の第961 Airborne Air Control Squadron (AACS) で、2010年から2014年までは Air Weapon Officer (AWO) と Electronic Combat Officer (ECO) としてティンカー空軍基地の第964AACS等で勤務しました。

2014年から2016年までは、ドイツの606 Air Control Squadron (ACS) という移動式地上管制部隊のメンバーとなりました。ACSは、航空機の管制に必要なすべての機器を保有および運用する特殊なタイプの米空軍の部隊です。これには、管制機材、レーダー、ラジオ、リンク、および長距離通信機器が含まれますが、発電機、燃料タンク、テント、貯蔵コンテナ、およびその他の多くの消耗品も含まれます。そしてもちろん、適切に訓練された専門家が、各機器を操作および保守します。これは非常にユニークな機会でした。

ドイツで2年間過ごした後、私は再びティンカー空軍基地の AWACS 部隊に戻り、そこで ECO を務めました。最終的に小牧基地への配属に選ばれ、ワシントン D.C. の Defense Language Institute (DLI) で日本語研修を受け、来日しました。

第5術科学校の任務は多岐にわたり、兵器管制幹部や警戒管制員の教育から、プログラマーや航空管制官の教育、航空自衛隊全体への英語教育の提供まで、さまざまな専門分野が含まれています。



Students training on the JADGE System

具体的に、教育第1科の兵器管制幹部課程では、学生は自動警戒管制システム（JADGE）の実践的な操作とともに、兵器プラットフォーム、レーダーと無線の使用、制御の基礎を含む約6か月の課程に参加します。その後、学生たちは全国の防空指令所で日本を守るために勤務します。

ここ第5術科学学校で他の教官と一緒に働き、教えることは私の喜びでした。私は自衛隊の運用について多くのことを学び、同時に米空軍の運用についても教えることができました。私は、米空軍と自衛隊が演習や作戦中にシームレスに統合できるようにするため、同じ交話基準 ALSA ACC(\*)を教育し、教育への参加を通して、米空軍と自衛隊が協力し合えるよう手助けをすることができました。第5術科学学校は、可能な限り最も強力な航空防衛力を提供するために、その技術と教



Participating in Komaki Open Base Event 2022



With a colleague at the 1st Education Section

育命令の改善を常に求めており、私は彼らの一部として尽力ができることを誇りに思っています。

誰もがよく知っているように、最近の新型コロナウイルスの流行は重大な課題をもたらしました。私達家族は2019年12月に日本に到着し、その後すぐにコロナが発生しました。これにより、日常生活や旅行そしてここ第5術科学学校での教育任務を達成することが困難になりました。しかしそのような困難にもかかわらず、自衛隊がスキルとプロ意識を持って教育し、その使命を達成し続けることに、私は常に感銘を受けました。

困難はありましたが、私たちは日本での任務に感謝し、日本の美と文化を体験してきました。私たちの最も記憶に残る時間は、同僚との外出や、豊田の香嵐渓や岐阜県の白川郷などの美しい場所への旅行です。



Summer Fireworks Festival at Meiji Mura

ここ小牧で、第5術科学学校のプロの皆さんと一緒に働いた日々を懐かしく思い出します。有能な幹部、曹士、教官、事務官等、そしてさまざまな支援スタッフの皆さんに感謝します。親切に対応していただき、感謝しています。将来、再び日本の方々と一緒に仕事をする機会があることを願っています！

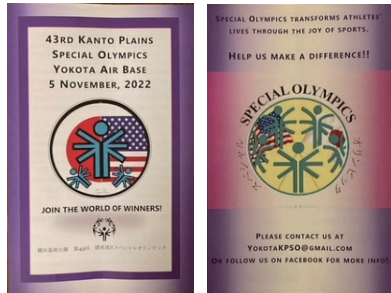
「ゴッドスピード！」

\*: 米軍 The Air Land Sea Application (=ALSA) Center が発行している Multi-Service Tactics, Techniques, and Procedures for Air Control Communication (=ACC) (米空軍の文書番号: AFTTP 3-2.8) という文書に基づく米陸軍、米海軍、米空軍、米海兵隊共通の管制要領 (交話手順)。これを現場では略して「ALSA ACC」(アルサエーシーシー) と呼んでいる。

# 第 43 回関東地区スペシャルオリンピックス支援

## JAAGA supports 43rd Kanto Plains Special Olympics

11月5日(土)、横田基地内ボンク・フィールドで第43回関東地区スペシャルオリンピックス(SO)が開催された。爽やかな秋晴れの下、基地内及び近隣の施設から招待された6歳から70歳までの52名のアスリートが集い、米空軍ボランティア、地域ボランティア、陸・海・空自衛隊から約600名の各基地准曹会員等がボランティアとして参加し、各種競技を支援しながら共に楽しんだ。



Volunteers and Supporters from Japan  
Self Defense Forces

大会委員長の374空輸航空団司令官アンドリュー・ラダン大佐(Col Andrew L. Roddan)が「横田基地と地域の皆様との交流がいかに重要であるか、またお互いの心を通わせることのできるこういったイベントがいかに大切であるかを深く感じています。今日はアスリート一人ひとりがスポーツに対する情熱をぶつけ、日ごろの成果を発揮してくれるでしょう。選手の皆さん、応援しています。今日は一日思う存分楽しんでください。頑張ってください。」と挨拶された。続いて日米の代表が選手宣誓をし、選手一人ひとりをリレーした聖火トーチが聖火台までつながり、その点火と同時に色とりどりの風船が真っ青な大空に放たれて第43

回関東地区SOは開会した。

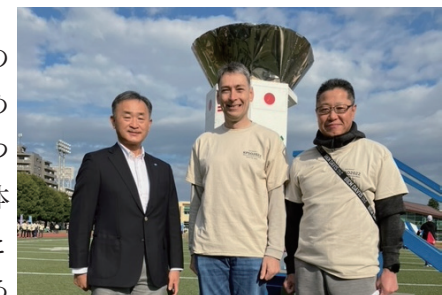
今から43年前の1980年、横田基地内でアスリート3名の参加で始まった関東地区SOは、各種徒競走、バスケット、立幅



The opening ceremony starts with torch-lighting and balloons release

飛び、ソフトボール投げ、フライングディスク、サッカーシュート、水泳、ボーリングなど競技種目も充実し、全てのアスリートは果敢に挑戦した。JAAGAから参加した川口、村田、藤田、朝倉4名の理事は、ボランティアとともに各種競技に参加するアスリートを応援した。

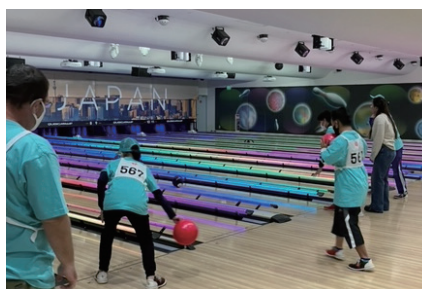
アスリート達の様々な能力を高め自信と勇気を持つことにより心と体を成長させることがSOの目標であるが、その一方で



(from left) Director Asakura, Col Roddan, Base commander, Yokota AFB, Col Izuhara, Base commander, Koku-Jieitai Yokota AB

大会ボランティアも参加アスリートから教えられることが多々あるとの感想が多いそうだ。最近「SOボランティア経験が無い若年隊員を連れて参加する上級空曹多いですよ。」と大会役員より伺ったことが印象的であった。

(朝倉理事記)



Athletes from ages six to 70 can participate in up to 10 events from 50-400 meter dashes, disk toss, long jump, ball throw, soccer ball kick, basketball, swimming, and bowling



## 航空自衛隊コーナー

### *From Koku-Jieitai*

宇宙状況把握多国間机上演習「グローバル・センチネル2022」に参加  
*Space Operations Group members Participate in Global Sentinel 2022*



(from left) Lt Col Kubota, Liaison Officer of Space Operations Command, CMSgt Miyata, MSgt Kusida, Lt Ebina

航空自衛隊は、7月25日（月）から8月3日（水）までの間、米国カリフォルニア州バンデンバーグ宇宙軍基地において実施された「宇宙状況把握多国間机上演習（グローバル・センチネル (Global Sentinel) 2022）」に航空自衛隊宇宙作戦群宇宙作戦隊蛭名公紀2等空尉他3名を参加させた。

「グローバル・センチネル」は、米宇宙コマンド (USSPACECOM) が主催する宇宙状況把握に関する机上演習であり、我が国における宇宙状況把握 (SSA : Space Situational Awareness) 態勢の構築に向けて、多国間連携による SSA 運用の知見を実地で習得する機会として捉えて参加している。航空自衛隊は、2015年の初回から継続して参加しており、コロナ禍による中止などがあって今回の参加が6回目となる。演習参加国も現在ではアメリカの他、イギリス、ドイツ、イスラエル、オーストラリアなど25か国と多く、SSAに関する国際社会の関心度の高さが伺える。

演習においては、参加国プレーヤーが同一のシミュレータ器材を使用して、ロケットの打上げ、人工衛星の大気圏への再突入、人工衛星同士の接近など宇宙空間で生起する各種事象の検知・対応や多国間における

情報共有の要領を訓練するとともに、SSAに関する多国間連携について参加国相互の意見交換を実施した。

人工衛星やスペースデブリといった宇宙物体の観測は、各国が保有するレーダーや光学望遠鏡などのセンサーで実施するが、単一の国のセンサーのみでは各種事象の全般状況を把握することができない。したがって、各国がそれぞれの観測で得た軌道情報を共有するなど、多国間で緊密に連携することが必要となってくる。本演習は、このような情報共有に主眼をおいて訓練しており、非常に有意義なものとなっている。

各国との意見交換では、各国それぞれの宇宙システムの運用や情報共有の要領、特に、平素からの取り組みや宇宙システム、宇宙関連部隊の組織編成などが話し合われ、参加者は学ぶことが多かったとのこと。また、人材育成や将来の計画についても話題になり、多くの参加国にとって宇宙関連部隊は新しい組織であるので、人材育成については各国共通の課題となっているようである。

(池田理事記)

## 寄稿 豪空軍が実施する多国間訓練「ピッチ・ブラック22」へ参加して

*Koku-Jieitai participates in the multinational exercise "Pitch Black 22"*

訓練実施部隊指揮官 第7航空団飛行群司令 1等空佐 唯野 昌孝

航空自衛隊は、8月9日～9月17日の間、豪北部準州ダーウィン空軍基地及び同周辺空域において豪空軍が実施する多国間訓練に参加した。実戦的環境において、米軍その他参加国の空軍と共同訓練を実施し、部隊の戦術技量向上並びに豪空軍や米軍との相互運用性を向上させるとともに参加国との相互理解の深化を図るため、航空総隊（人員150名、航空機F-2×6機）が参加し、防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練及び空中給油訓練を実施した。（空幕報道発表抜粋）

今回の貴重な経験を訓練部隊指揮官から寄稿いただいたので以下に紹介する。

## 1 はじめに

JAAGA会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のことと存じます。今回、航空自衛隊として初めて参加した豪空軍が実施する多国間訓練「ピッチ・ブラック22」（PB22）について、簡単ではありますが紹介させていただきます。

## 2 ピッチ・ブラックの概要

これまで航空自衛隊は「レッド・フラッグ・アラスカ」（RFA）及び「コープ・ノース」（CN）という米空軍主体かつ米国内での海外訓練の経験は多くありましたが、今回のピッチ・ブラック（PB）は、日本の戦闘機



6F-2s arrive at RAAF Base Darwin

であるF-2が、米国以外の地に初めて降り立ったこと及び日本のピッチ・ブラックPBへの参加は初ということで、手探り状態の訓練でした。特に、初めて赤道を超えて南半球のオーストラリアに展開するということが、訓練の内容はもちろん、後方支援、現地での生活等、不安は尽きませんでした。

また、本訓練には今回初めて訓練を共にする参加国も含め、17か国、約2,000名が参加しましたが、それらの参加国と防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練及び空中



Participants of Pitch Black (PB) from Koku-Jieitai

給油訓練を実施したことは、大変貴重な経験となりました。特に、RFAやCNでは実施していない夜間帯における訓練を、海外で初めて実施したことも大きな成果でした。本訓練においては、参加国との意思疎通はもちろん、戦い方及び安全確保に関する考え方の相違等により、訓練では相当苦勞するのではないかと予想しておりましたが、参加

した全ての隊員がそのプロフェッショナルリズムを遺憾なく発揮し、全ての任務を安全に完遂してくれました。

なお、訓練期間中、独空軍と仏空軍の戦闘機への体験搭乗も実現し、他国の訓練を実地に体験できたことは、それぞれの国との相互理解及び関係強化に資するものでした。

今回の訓練はインド太平洋に存在する国々のみならず、欧州からも多数参加した大規模な訓練でした。本訓練を通じたこれらの国々との関係強化は、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化はもちろん、欧州の友好国によるアジアへのコミットメントの強化にもつながると確信しております。なお、PB終了後の9月下旬に、独空軍が「ラピッド・パシフィック」として、ユーロファイター等により初めて航空自衛隊百里基地を訪問したこともその証左と言えます。

## 3 最後に

今回のPBは、日本は初参加ということ差し引いても、他国に先駆けて最初に展開した戦闘機ということも相まって、豪州国内及び参加国からの関心の高さが随所で見られました。地元住民への訓練の理解促進のために実施されたミンディルビーチでのフライバイ及びダーウィン基地でのオープン・



Experience ride on Eurofighter Typhoon (↑), and Rafale (↓)



PB Open Day at Darwin Air Base

じて、日本、空自そしてF-2の素晴らしさを発信できたと思います。

今から80年前、日本とオーストラリアは敵味方に分かれて戦争をし、旧日本軍のダーウィンへの空爆により多くの犠牲者が出た歴史を後世に伝えるため、慰霊碑が建立されております。



Laying Wreath at Darwin Cenotaph

しかしながら、今では新たな日豪関係を築き、今回の訓練においては、お互いが信頼できる仲間としてダーウィンの地を訪問することができました。訓練期間中、

市内をフライトスーツで歩いていると、「Welcome to Pitch Black」と市民に声をかけられた隊員もいたことから、良好な関係を築けていると実感できました。今回、歴史に新たな1ページを綴った貴重な機会に立ち会えたことは、参加隊員全員誇りに思っております。

末筆ながら、会員の皆様のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、本訓練参加の所感とさせていただきます。

(筆者紹介) 第7航空団 飛行群司令  
1等空佐 唯野 昌孝  
防大44期 操縦

## 米空軍コーナー From 5th Air Force

### 18th Wing, 22nd ARW expand ACE capabilities

<https://www.kadena.af.mil/News/Article/3195643/18th-wing-22nd-arw-expand-ace-capabilities/>

カンザス州マコーネル空軍基地に所属し、KC-46Aに搭乗する隊員たちが、ACE (Agile Combat Employment: 迅速機敏な戦闘展開) 能力向上のため10月11日から15日の間、嘉手納基地に展開した。

第22空中給油航空団(22 ARW)のメンバーは、第18航空団ACEオフィス、第18兵站準備隊(18LRS)、第18通信隊、第18土木工兵隊、第353特殊作戦支援隊のメンバーと協力して、ACEトレーニングの目標を確認するとともに、戦術、技術、手順を共有した。

ACEの概念は、作戦レベルの大規模な動きを戦術レベルの小規模なものに変えることを主眼にしたもので、作戦上のニーズを満たしつつ、小規模な部隊を各地に分散させ、既存の飛行場への依存度を最小化するものである。



A KC-46A Pegasus from McConnell Air Force Base is parked alongside an R-12 refueling truck for hot pit refueling at Kadena Air Base

今回の展開の主な目的は、ここ太平洋の要衝にKC-46A(ペガサス)のホット・ピット給油サイトを設立することである。今年初め、18LRSの隊員は、太平洋地域において、KC-135へのホット・ピット・リフュエル(注:エンジン作動状態での給油)を初めて実施した。次の目標は、より近代的なKC-46に実施することであった。

ホット・ピット・リフュエルは、給油のための在地時間を短縮するために使用される技術である。航空機が着陸した後、パイロットがエンジンをかけたまま燃料



KC-46A Pegasus assigned to the 22nd Air Refueling Wing is parked on the flightline at Kadena Air Base



An Airman from the 22nd Air Refueling Wing marshals an R-12 refueling truck into position for hot pit refueling operations

を供給するため、時間や人員だけでなく、機器の設置面積も削減でき、ACE の運用に最適な能力である。

第 18 航空団 ACE 責任者のティモシー ワイズマン



Airman pulls an R-12 refueling truck hose at Kadena Air Base

ン曹長 (CMSgt Timothy Wiseman) は、「嘉手納と PACAF の ACE チームにとって、迅速な給油は重点分野の 1 つだ。紛争環境では、指揮官はオプションを必要としており、我々が分散された基地からの航空機出撃を求められたときに、不可欠な能力と教訓を得るため、主要基地で隊員に必要な訓練の機会を与える」と語った。

次の目標は、最小限の装備を持たせた、複数分野の能力を持つ隊員 (MCA: Multi-Capable Airmen) により、展開地に遠征指揮統制基地 (C2) を設置し、KC-46A と高周波無線で通信することである。



Airmen unload a tent from the back of a truck during an Agile Combat Employment exercise

ワイズマン曹長は、実際の有事の際には、航空機の出撃中に、攻撃により滑走路が破壊される可能性がある」と説明する。この場合、展開 C2 は別の場所に設置され、航空機との通信を確立し、攻撃に関する重要な情報を伝え、航空機を次の着陸地点に指向させることができる。

MCA が検証されていない環境で、訓練進行役のいない C2 を設置するのは初めてのことである。訓練目標がすべて達成されたわけではないとしながら、隊員たちが貴重な教訓を得たと説明する。

「新しいことに挑戦するには、成功のために、途中で失敗も経験しなければならぬことを受け入れること」であり、「被訓練者に繰り返し演練させて体に覚えさせ、そのマッスルメモリーを発達させることで、実際の有事に遭遇したとき、必要に応じて実行することができる」と言う。

また、地上で C2 ポストが設置されている間、第 909 空中給油隊と第 18 航空医療搬送隊 (18AES(18th

Aeromedical Evacuation Squadron)) が KC-46A に搭乗し空中退避の模擬訓練を行うなど、22ARW 隊員は機体慣熟訓練を実施した。

18AES 看護師、Milan Tandoc 大尉は、ここにいる AES 要員のほとんどは KC-46 の内部で活動したことがなく、通常は KC-135 で活動している。KC-46 と KC-135 の間には、空調設備の安定性、貨物エリアの照度、患者用担架支柱や医療機器用コンセント等、いくつかの顕著な違いがあると述べる。

異なる担任区域に所在する部隊間の共同訓練は、隊員が最良の訓練経験を共有し、迅速機敏な戦闘展開能力を強化し、共通の任務を達成するためのシームレスな共同運用を強化する。



Airmen set up a tent during an Agile Combat Employment exercise

第 22 作戦支援飛行隊機動展開サブチーフのティモシー ブルック曹長

(CMSgt Timothy Bulluck) は、異なる環境で必要な能力を取得し、課題を克服することは、ACE 訓練の重要な側面であると述べた。

「展開中に任務を遂行するには難しい場合があり、ACE チームが弾力的で柔軟な対応ができることは有益なことだ」とブルック曹長は述べている。

第 18 航空団は、継続して ACE 概念を完成させることにより、より効果的に任務を遂行できる多機能な隊員を育成することに専念している。

ワイズマン曹長は、「ACE の開発に関しては、私たちは皆一緒に取り組んでいる」とし、「これは嘉手納基地の取り組みで



Airmen secure a high frequency radio antenna

も PACAF 中心の取り組みでもなく、すべての隊員が ACE の運用に関わることになる。マコーネルチームと協力して戦場での成功率を最大化する ACE 訓練を拡充することで、ACE の構成概念のもとで勝利するための隊員を育てることができると述べた。

(浅井理事仮訳)

## 寄稿 「米国ワシントン D.C. 勤務所感」

Letter from , Lt Col HIROSE Takashi former Assistant Defense And Assistant Air Attaché to the U.S.

今回、JAAGA だよりへの寄稿の機会を頂き、大変光栄に思います。私は 2019 年 6 月から 2022 年 6 月までの 3 年間、米国ワシントン D C に所在する在米国日本大使館で防衛駐在官として勤務しておりました。空自から米国へは 2 名の防衛駐在官を派遣しておりますが、私は 2 佐で赴任する防衛駐在官として、将補あるいは 1 佐の防衛駐在官を補佐し、各種の実務調整を実施する立場にありました。

JAAGA の皆様は毎年 9 月に訪米されると認識しています。2022 年は 9/15 ～ 23 の日程で実施されたとのことですが、私は 2019 年と 2021 年の JAAGA 訪米団の来訪にあたり、米空軍高官との会談調整等をご支援させて頂きました。このうち 2019 年は、米空軍将官との懇談や、エバハート米退役大将宅で実施された懇親会にも



Lt Col and Mrs. Hirose with Gen(ret) Saito, former President, JAAGA, in 2019

同席させて頂くことができました。2021 年は菅総理のワシントン D C 訪問とタイミン

グが重複し、空港関係の対応のためほとんど同行できず、私が JAAGA 訪問団に同行できたのは任期中 1 回だけだったのですが、空軍種ハイレベル交流の一端を知る機会を得たことは貴重な経験でした。ワシントン D C で勤務しておりますと、2 佐の防衛駐在官とはいえ、カウンターパートとなる担当級だけでなく、将官級軍人の発言に触れる機会も多々あります。米軍高官の発言からは、現在の安全保障環境を受け、自衛隊に対する期待は高くなっているように感じます。在米国日本大使館では自衛隊記念日行事をはじめ、大使公邸にて米軍高官をご招待する機会があります。私の任期 3 年の間、各軍の制服の長である海軍作戦部長、海兵隊総司令官、宇宙軍作戦部長は大使公邸に

訪して頂いたことがあり、複数回来訪頂いた方もおられます。他国の軍記念日レセプションに参加してみると、このように軍種の長が出席している国はそれほど多くありません。防衛駐在官の立場で見ると、レセプションの場にわざわざ時間を作って来訪いただけ

る、というのは関係を重要視していることを示すものだと思います。空軍高官に注目しますと、2021 年の自衛隊記念日レセプションに空軍長官にお越しいただくことはできたのですが、残念ながら制服の空軍参謀総長は 3 年間一度もお越しいただくことはできませんでした。他



Main guests of Defense Forces Day reception at Ambassador's residence, in 2021

国のレセプションでは一度だけブラウン空軍参謀総長をお見かけしたのですが、これは 2021 年末の英国空軍創設記念レセプションでした。これは国軍ではなく空軍単独のレセプションでしたが、空軍参謀長以下部長級の米軍将官が多く参加しており、これほど空軍の将官が集合することは見たことがありませんでした。防衛駐在官の努力不足である、というお叱りを受けるかもしれませんが、やはり実感として、日本を特別重要視しているように感じる他軍種に比して、米空軍の日本に対する温度感には相違があるように感じます。

そのような中、シュナイダー空軍参謀本部参謀長を始め、在日勤務経験のある高官は大使館からの招待に応じていただけることも多く、在日米軍経験者は、米空軍内で日米関係の重要性を良く理解して頂ける存在として非常に重要であると感じます。JAAGA の創設主旨は日米空軍種間の協力と相互理解の推進、と理解しておりますが、宇宙領域を含め日米空軍種の連携をますます強化する必要のある中、その存在は現役として大変心強く思っております。引き続き皆様からも、日米空軍種間の交流をご支援頂けるようお願い申し上げます。

(筆者紹介) 前在米国日本国大使館防衛駐在官  
現空幕教育室  
2 等空佐 廣瀬 貴之  
防大 47 期 情報通信

# 寄稿 「米太平洋空軍司令部連絡官勤務概況」

*Letter from , Col OKUMURA Masahiro, Liaison officer, PACAF*

私は、米太平洋空軍 (PACAF: Pacific Air Forces) 司令部において日米間の連絡調整業務を実施しています。所属は空幕運支課兼防衛課であり、米国ハワイ州オアフ島のパールハーバー・ヒッカム統合基地 (JBPHH: Joint Base Pearl Harbor Hickam) 所在の PACAF 司令部で国際関係業務を担当している A5I に派遣されています。



Col Okumura, in front of HQ PACAF building

空自連絡官は私のほか、航空総隊より PACAF へ3名 (情報、運用、通信・サイバー)、空幕より 94th AAMDC (Army Air and Missile Defense Command) へ1名 (高射) が派遣されています。また、PACAF 隷下のサイバースペース隊において防衛交換要員1名 (通信) が勤務しており、ハワイ州で勤務している全自衛官11名のうち半数以上の6名が航空自衛官です。



Coordinating with PACAF staff

主な連絡官業務は、日米共同の任務及び訓練等、PACAF と空自との間の対面又はオンラインでの会議、日本からハワイへの来訪者支援等に関して、PACAF 司令部の関係スタッフと直接調整し所要の準備を整えることであり、当地における会議等には可能な限り参加又は陪席しています。これら業務を通して、日米双方向の意思疎通の円滑化を図り、日米空軍種間の連携強化に貢献することができるよう努めています。また、兼務している空幕防衛課員として、太平洋島嶼国と安全保障協力を推進し FOIP (Free and Open Indo-Pacific) の維持・強化に寄与するため、太平洋島嶼国との信頼関係を構築していくことに関しても近年取り組んでいます。クリスマス・ドロップ等の共同訓練の機会に合わせて太

平洋島嶼国を訪問し、空自の活動に対する理解を効果的に増進するための調整を進めています。

なお、PACAF 司令部 A5I には、空自のほか、オーストラリア、韓国及びシンガポールの各空軍から派遣されている連絡官も勤務しており、他国連絡官とも良好な人間関係を形成し、適時情報交換を実施しつつ相互理解を深化させています。

PACAF が担任するインド太平洋地域の AOR (Area of Responsibility) は地球の表面積全体の 50% 以上を占め、AOR 内には多数の核保有国や重要なシーレーンが所在しています。PACAF は、この非常に広大かつ軍事戦略上重要な区域における広範多岐に渡る作戦全般の指揮統制を実施することから、当該区域の望ましい安全保障環境構築のため、AOR 内外の多くの同盟国及びパートナー国との訓練及び会議等を高い視座で推進しています。日本は米国の同盟国のうちの一つではありますが、PACAF としては空自との連携を維持・強化することの重要性を強く認識していることを当地における日々の業務で実感するとともに、日米間の緊密な連携はインド太平洋地域全体の安定した安全保障環境構築に直結するものと確信しています。

JAAGA 訪米団の皆様のハワイ来訪支援をさせていただいた際は、PACAF のスタッフ達は JAAGA 訪米団の受入れ準備に非常に前向きかつ協力的な姿勢であり、JAAGA の皆様を通じての空自との強固な関係を重視していると感じることができました。

空自と PACAF との間では、従前より緊密な協力関係を構築してきているところ、2021 年春に私が PACAF へ派遣された以降、特に、米空軍が昨年末にドクトリンノートを公表した ACE (Agile Combat Employment) と、米軍が推進している IAMD(Integrated Air and Missile Defense) の分野において、空自に対する関与と期待が更に強くなっていると認識しています。PACAF は、これらの分野に関し、日米空軍種間のみならず他軍種との統合と多国間の連携強化のための演習や会議を数多く計画しており、回を重ねるごとに内容を充実させ、共同対処態勢の確立と対処能力の向上を図っています。これらに関する調

整は勿論のこと案件の緩急轻重問わず、PACAF の担当者から司令官まで、我々連絡官を通しての日米調整をととても大切にいただいています。

先日は、在ハワイの全連絡官等が INDOPACOM 司令官室へ招かれ、

日米関係強化に資する連絡官業務への謝意を Aquilino 大將から直接賜り、大変光栄であるとともに、連絡官としての重責を改めて自覚しました。



ADM Aquilino, INDOPACOM/CC presents Japan LNO (Liaison officer) working in Hawaii with lithograph

ハワイ州では COVID-19 の影響により 2020 年にロックダウンが 2 度発出され、州外からの旅行客に対する 2 週間の隔離義務等により、観光業で成り立つハワイの経済は極めて大きな打撃を受けました。2020 年 10 月以降、ハワイ入域者に対する PCR 検査の陰性証明やワクチン接種証明の提示等による規制措置の導入と、それら規制の段階的解除によりハワイの観光業は回復してきており、本年 8 月には、ハワイを訪れた観光客の消費額が COVID-19 の影響を受ける以前の 2019 年同期を上回りました。ただし、日本人に限ると 2019 年には 158 万人の観光客がハワイを訪れていましたが、2021 年は僅か 2 万 4 千人、本年の日本人観光客は増加傾向ではあるもののサーチャージや円安の影響も受け 2019 年比 10% にも満たないものと予測されています。

防衛省・自衛隊のハワイ来訪者は、今春から急速に

増加しています。日米間又は多国間会議は 2 年間以上オンラインのみでしか実施できなかったことから、対面での会議を早く再開したいとの思いが強くなっていきます。COVID-19 による各種制限下では共同訓練も中止せざるを得ない状況となりましたが、感染対策を徹底しながら実施可能となり、今夏には空自 C-2 が初めてハワイへ飛来し戦術輸送に係る技量及び日米共同対処能力の向上のため、在ハワイ米空軍との共同戦術空輸訓練を実施しました。また、この機会を活用して、在ホノルル日本首席領事等の方々に C-2 へ体験搭乗をし



Koku-Jieitai C-2 arrives at JBPHH

ていただき、空自への理解を深めていただくことができました。

連絡官としての私の任期は残り少なくなってきましたが、空自及び PACAF を取り巻く情勢や各種訓練等の計画とその調整状況を随時掌握しつつ、日米が同じ方向へ進んで行く上での信頼関係をより強くし、日米相互に補完し合うことができる関係の構築に尽力します。引き続きご指導いただけますと幸甚に存じます。

(筆者紹介) 米太平洋空軍司令部連絡官

1 等空佐 奥村 昌弘

防大 44 期 操縦

## 投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会 (JAAGA) は、お蔭様で令和 5 年 7 月で創立 27 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。「JAAGA だより」も、JAAGA 活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様 (会員に限らず現役隊員の皆様) からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

【連絡先】 (郵便) 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号

ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 広報係

(メール) [pubaffair@jaaga.jp](mailto:pubaffair@jaaga.jp)

## 横田基地日米友好祭に参加

### JAAGA members participate in Friendship Festival 2022

日米友好祭『Friendship Festival 2022』が5月21日及び22日の2日間にわたり開催された。コロナ禍により開催が見送られていたため、3年ぶりの開催となり、延べ約11万人が来場したと報じられている。



(from left) Director Murata, Fujita, Yoshida, Maj Gen Kosinski, Deputy Commander of 5th AF and Director Iwasaki

友好祭初日の21日、基地司令官である第374輸送航空団司令官アンドリュー J. キャンベル大佐 (Col Andrew J. Campbell, Commander 374AW) が主催するレセプションが将校クラブで開催され、周辺自治体の首長や横田基地所在の部隊指揮官が参加する中、JAAGAから吉田、岩崎、藤田、村田の各理事が参加した。



Mr. and Mrs. Yoshida with Lt Gen Rupp, Commander of USFJ & 5th AF and wife

また、夕刻には、在日米軍司令

官兼ねて第5航空軍司令官リッキー N. ラップ中将 (Lt Gen Ricky N. Rupp, Commander, US Force Japan & 5 AF) 夫妻が主催するレセプションがベースオペレーション前の日本庭園で開催され、航空幕僚長をはじめとする首都圏に所在する空自メジャーコマンドの指揮官等が参加する中、午前中と同じJAAGA代表メンバーが参加し、久しぶりの対面による懇談の場を楽しんだ。



Huge Airlifter C-5 "GALAXY"

21日は朝から雨が降り、友好祭としてあいにくの天気となったが、3年ぶり開催とあって多くの来場者でエプロンが埋め尽くされ、展示機には見学の長蛇の列ができた。夜には天気も回復し、恒例の花火が打ち上げられ、来場者を魅了した。



Beautiful Fireworks revive after three years

22日は、日米首脳会談のため来日したバイデン大統領が搭乗したエア・フォース・ワンが横田基地に飛来し友好祭の盛り上げに一役買っていた。

(吉田理事記)

## JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様のご協力が必要です。

投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」(男性にはタイピン、女性にはピンブローチ)を謹呈させていただきます。

「JAAGA だよりを私たちと一緒に作っていきましょう！」

JAAGA 広報係





## 米国独立記念日を祝う嘉手納基地懇親会に参加 JAAGA members participate in 18th Wing Forth of July Event in Kadena AB

当初7月4日に開催される予定であった米国独立記念日を祝う懇親会が、台風の影響で延期され、7月9日（土）第18航空団司令官デビッド S. エグリン准将（Brig Gen David S. Eaglin）の主催により嘉手納基地屋外広場で開催された。

嘉手納基地のみならず周辺基地の隊員、同家族及び招待された関係自治体の長、自衛隊関係者等の来賓も含めて多数の方々が参加され、JAAGAからは会



Brig Gen David S. Eaglin and Mr. & Mrs. Maruno, Head of JAAGA Okinawa branch

長代理として沖縄支部長丸野夫妻が出席した。

バンドの演奏、花火の打ち上げ、出店等もあり、久しぶりに嘉手納基地で開催された大きなイベントを参加者全員が楽しんでいるように思えた。

エグリン准将はご挨拶の中で凶弾に倒れた故安部晋三元総理大臣に対し、哀悼の意を表すとともに黙祷を捧げられた。

（丸野沖縄支部長記）



Opening remarks by Brig Gen David S. Eaglin

## 三沢基地エアフォースボールに参加

### JAAGA members participate in Air Force Ball in Misawa AB

9月19日（金）、米空軍三沢基地下士官クラブボールルームで米軍三沢基地司令官リチャード大佐（Col Michael P. Richard, Commander of the 35th Fighter Wing）の主催により、2022 米空軍創立 75 周年記念晩餐会（エアフォースボール）が開催された。

JAAGAからは杉山会長代理として池添三沢支部長夫妻及び山本事務局長夫妻が出席した。招待者として航空自衛隊から北部航空方面隊司令



(from left) Mr. and Mrs. Ikezoe, Col Richard, Mr. and Mrs. Yamamoto

官安藤空将、准曹士先任池邊准空尉、第3航空団司令大嶋空将補、准曹士先任檜崎准空尉及び北部警戒管制団司令樋山空将補、また、三沢市から三沢市長及び市議会議長をはじめ各関係団体が招待された。

晩餐会に先立ち、18時からソーシャルタイムがあり19時から20時50分まで晩餐会が開催された。晩餐会は国旗・軍旗入場、日米国歌斉唱、お祈り、琴演奏

会、来賓紹介、戦没隊員及び行方不明者のための行事の後、マイケル P. リチャード大佐の挨拶に続いて、夕食会が催された。打ち解けた雰囲気の中、北部航空音楽隊の演奏を楽しみ、ケーキカットにより75周年を祝った後、空軍歌が斉唱され夕食会は終了となった。その後バンド演奏とダンスタイムが行われた。

リチャード大佐は挨拶で「みんなは、米空軍の兵隊であることに誇りを持ちなさい。私もこれまで素晴らしい仲間と一緒に米空軍に所属できたことを誇りに思い、これからも皆とともに歩んでいきたい」と述べた。

また、空軍勤務経験の最も長い軍人と一番短い軍人が、それぞれの思いをスピーチし晩餐会を盛り上げた。

（池添三沢支部長記）



Col Richard makes a speech to be proud of serving in USAF

## JAAGA 理事の活動紹介 「広報理事」

広報理事の活動について紹介します。私は2020年にJAAGAに入会し、翌年、広報理事を担当することとなりました。衛生技官(心理)としての職歴によるものかと思えます。

広報の主な業務は年2回6月と12月に発行される「JAAGA だより」(以下「だより」とする。)の編集・発行です。発行日の2か月前から毎週、編集ミーティングが開かれます。

「だより」の記事は、JAAGA イベントの担当理事や参加者からのご寄稿・投稿による他、広報理事が研修や部



Directors of JAAGA public affairs have the video meeting to publish JAAGA DAYORI

隊激励へ同行取材し、作成に努めています。

記事作成は当然ながら客観的で冷静でなければなりません。掲載に至る編集過程においては記事ごとに白熱した議論が交わされます。例えば、空白に関わるある用語が記事中に登場した場合、その用語の使い方は正しいのか、現在でもその用法で使われているのかを空幕担当部署に確認したりもします。空幕勤務経験のない私は、この辺についていくのが大変です。

空白・米軍等のインターネットサイトの情報を基に作成した記事であっても、統幕や内局等に内容を確認したり関連情報を収集・分析して正確を期し、さらに可能であれば当事者に執筆を依頼して記事の充実を図ります。

「だより」は正確性ととも記録性を重視しています。単なる状況報告であれば「有意義なイベントで、参加者は満足の笑みを浮かべていた」と結び、また、正確さを求めるのであれば進行プログラムを載せれば済みます。見聞録でも進行表でもない記録とは、将来に向けた参考資料となる誌面です。イベントであれば、開催趣旨、どのように計画されたか、遂行の経過について、結果(効果)、参加者の意見等の情報が含まれます。

JAAGAの活動を内外に周知するとともに、将来の読者にとっても読み返して参考資料になる、そんな意気込みで誌面作りを行っています。なお、ご存知の通り「だより」のバックナンバーはJAAGAのサイトで参照することができます。

編集の仕事は、記事を集めて印刷所に渡して終了、では

ありません。編集ソフトウェアを使用して完成形の形で印刷所に納付しており、タイトルや写真を含めたレイアウト、文字の字体と大きさ、背景の色、枠線による装飾等々の処理が必要です。この作業は編集長一人が担っており、その膨大な作業量と苦労は大変なものと思察します。私が編集業務に関わって驚いたことの一つです。

さらに広報の仕事内容は「だより」の編集に留まらず、発行部数・発送先の調整、発送住所録・配布票の管理、執筆記念品の進呈、カメラ・録音機等取材機器の管理等々と多岐にわたっています。

「だより」の配布先は、正・賛助会員、防衛大臣、防衛関係国会議員、外務省関係者、防衛省内局、統幕、防衛装備庁、国内外の空白組織、米空軍関係等と非常に広範囲です。私が勤務していた各々の部隊にも送られていましたが、現役時代に「だより」を読んだ記憶がありません。私が見落としていたか、部隊側が回覧範囲を絞っていたのでしょうか。個人的意見ですが、新入会員を増やすためにも、現役隊員との更なる交流促進が望まれます。

広報理事の所掌業務は「1. 広報に関する事」以外に「2.

会報に関する事  
3. 会史に関する事」を含んでいます。会報として邦文・英文のJAAGA広報用パンフレットも作成しています。会史関係の活動では、JAAGA創設20周



Publish the brochure introducing JAAGA

年に合わせ、だより50号で特集を組むとともに、20年の歩みを含む記念DVDを作成しました。

JAAGA理事の理事活動紹介のコーナーは58号の「企画理事」を皮切りに、総務、渉外、会員、広報と続き、次号では締めくくりとして財務を紹介する予定です。会員の方々にとっても曖昧であったJAAGA各理事の活動内容を知っていただけたものと思います。「だより」では今後も新コーナーの開設を含め内容を充実させていきます。ご意見、リクエスト等をお寄せください。また、今号でも、現役隊員・会員からのご寄稿・投稿を頂きました。こちらも引き続きの積極的なご寄稿・投稿をお願いします。

(竹内理事記)

## 新入会員紹介

### 【正会員 6名】

氏名	住所	氏名	住所
増田 信行	福岡県福岡市	佐藤 聖一	埼玉県入間市
千秋 進	神奈川県横浜市	廣明 一郎	東京都目黒区
杉村 恭士	埼玉県ふじみ野市	菊田 哲	東京都多摩市

### 【個人賛助会員 4名】

氏名	住所	氏名	住所
小室 容子	東京都新宿区	岩下 清志	茨城県古河市
大嶺 千恵子	沖縄県那覇市	魚住 真理	東京都八王子

## 賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400～2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしております！

### 【法人賛助会員の皆様】 32 社

株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、有限会社エム、株式会社エクシオテック、沖電気工業株式会社、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、新明和工業株式会社、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、株式会社日商ファインライフ、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、富士通株式会社、洲上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱商事株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレジジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド

### 【団体賛助会員の皆様】 2 団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

### 【個人賛助会員の皆様】 92 名

## 会員募集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 6 名、賛助会員 4 名の合計 10 名の入会を得ることができました。
  - 令和 4 年 11 月 30 日現在、正会員数 261 名、個人賛助会員数 92 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 32 社となっております。
  - 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
- 推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

### 【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊の OB

賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

### 【連絡先】

郵 便：〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 会員係

メール：membership@jaaga.jp

## 編集後記

◇ 2019 年末に世界で初めて新型コロナウイルスが確認されてから 3 年になります。この間にテレワークやローテーション勤務、オンライン会議の普及が進み、人の多く集まる場所での換気やマスク着用などが徹底されるなど「With コロナ」の生活への適応が進んでいます。◇ JAAGA の活動も、本稿で紹介した「訪米事業」をはじめとして各種の事業を感染拡大防止の措置に配慮した取り組みにより、コロナ以前の活動実績に戻りつつあります。◇ 「だより」の編集では、対面での議論に制約がある中でもリモートを活用した進め方が板についてきたように思います。◇ JAAGA の一員として日米関係の強化、深化の一翼を担うことを目標に、個性とチームワークで取り組んでいきます。

(編集長)

◆ 新たな枠組みへ、そして新たな領域へ、「エアフォース」がダイナミックに取り組む姿を「だより」から垣間見ることができます (F)

◆ コロナ禍から 3 年。出張する機会も増え、懐かしい人との再会も多くなりました。新しい活動様式にも慣れつつ、活動を活発化させていきたいものです。(A)

◆ 今回、1 か月強日本刀「冬廣」と過ごしましたが、その刃紋や拵えから名刀に間違いなく、刀工や鋳職人等の汗の結晶のオーラがヒシヒシと伝わり、また、美しく維持管理されていたので米軍人元所有者殿の誠意も感じられました。末永き日米友好を祈念します。(I)

◆ 空自や米軍の航空機が勢いよく青空を駆け回る姿を見て「ようやく元に戻ってきたかあ」と嬉しくなりました。まだまだ先は油断できないようですが、ひとつの大きなハードルを超えられたのではないのでしょうか (O)

◆ 「明日は 1 ヶ月先の寒さです」「明日は 1 ヶ月前の暑さです」 今年の関東地方には、秋というシーズンがありませんでした。気象もコロナも先行きは分かりませんが、『一寸先は闇』と焦るより、『人間万事塞翁が馬』と一步引く観方もあると思うのですが、いかがでしょうか。(T)



作：山本康正 OB

編集担当 (広報理事)：福永充史、浅井玲、池田五十二、太田徹、竹内由則

JAAGA だよりは、ホームページからもご覧いただけます (創刊号から第 49 号までは「20 年の歩み」に掲載)。

(JAAGA ホームページ：http://www.jaaga.jp/)